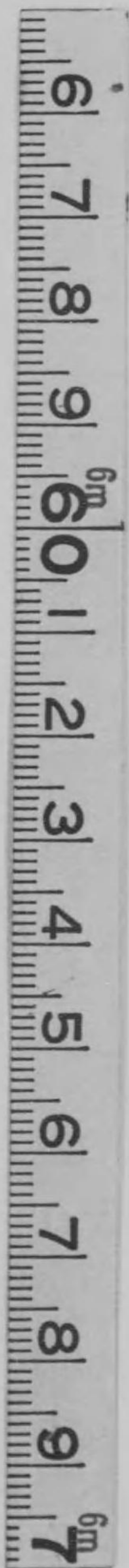


390

26



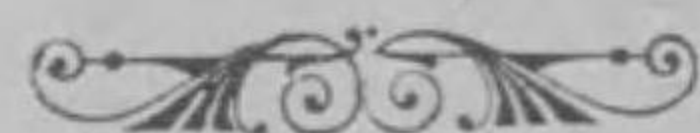
始



STRIFE

BY

JOHN GALSWORTHY



書叢藝文働勞

編四第

爭鬪

和氣律次郎譯
ジョン・ゴルスウオーシイ作

版閣文叢

390-26



ジョン・ゴルスウオーシイ作
和氣律次郎譯

闘

叢
文
閣
版

大正
9. 7. 13
内交

勞資の争闘

「労働」の代表者であるロバアツは云ふ——「この戦は國家の身體と血とが吸血動物を相手取つての戦である。彼等が打つ有らゆる打撃、彼等が吸ふ有らゆる息で彼等自身を消耗するものが、彼等によつて身を肥やし、慈悲深い自然の法則によつて何處までも何處までもふとる處のものを相手取つての戦である。そのものこそ「資本」である！それは人間の額の汗と彼等の頭腦の苦惱とを、その思ふままの代價で買ふ處のものだ。それは出来るだけ多くを取つて、出来るだけ少なく與ふるものだ。それが資本といふものだ。それは諸君に「お前達は實に氣の毒だな——お前は大變困つてるやうだね」と云ふが、諸君を少しでも樂にしてやる爲に其配當の半シルすらも與へやうとはしないものだ。それが「資本」といふものだ！口では色んなことを云つてゐるが、彼等の内に貧乏人を助ける爲に所得税を一ペニイでも上げることに同意するものが一人でもあるならば云つて貰ひ度い？それが「資本」といふものだ！それは白面石心の怪物だ！……吾々が戦つてゐるのは、この今といふ短い時間の爲ではない、吾々自身の爲ではない、吾々の小さな肉體や、その要求の爲ではない

有らゆる未來を通じて來るすべてのものの爲である。……若し吾々が、それに對して胸に胸を眼に眼を向け、それが助命を嘆願するまでそれを壓迫するだけの男性的精神を持つてゐないならば、それは依然として生命を吸ひ續けて行くに違ひない、而して吾々は永久に犬よりもひどい状態に留つてゐるに違ひない。』

「資本」の代表者であるアンソニーは云ふ——「職工は公正な取扱ひを受けてゐる、彼等は立派な賃銀を與へられてゐる、吾々は何時彼等の不平を聞いてやつてゐる。時代が變つたといふものがある、若しさうだとすると、わしはそれと一緒に變らなかつたのだ。又變らうとも思はない。主人も職工も平等だといふものがある。馬鹿な！一軒の家には主人は一人しかない譯だ！二人の人間が出會へば、優れた者が他を支配するのだ。「資本」と「労働」とは利害を一にするといふものがある。馬鹿な！その二つのものの利害は、極と極とのやうに遠く相離れてゐるものだ。……職工を扱ふ方法は唯一つしかない——それは鐵腕をもつてすることだ。……主人は主人だ、職工は職工だ！一つの要求を容れたら、彼等はそれを六倍するのだ。……若しわしが彼等の立場にやつたら、わしも屹度同じに違ひない。が、わしは彼等の立場にゐない。わしは斷言して置くが、何時か、諸君が

此處で讓歩し彼處で讓歩してゐる内に——諸君は足元の大地を離れて、破産の沼に深く落ち込んでゐるのを發見するに違ひない、そして諸君と共に、諸君が讓歩した處の者共が同じ沼に藻掻いてゐるのを發見するに違ひない。……わしは混亂の暗い流によつて脅かされ、俗衆政府によつて脅かされ、其他わしの眼に見えないものによつて脅かされてゐる此國の將來について考へてゐるのだ。』

この「労働」と「資本」との激しい戦を如實に描いたものが、ゴルスウオシイの「争闘」である。

彼は——他のすべての近代作家と同じやうに——「争闘」において何等それに對する解決を與へてはゐない。彼は多數の問題を提出して、その解答を讀者自らに残してゐる。然しながら、彼の提出せる問題は決して曖昧なものではない、それは頗る明確である。即ち彼は——労働對資本の争闘が現世紀の大なる悩みであること。その二つのものの利害は全く相反してゐること。その間には橋を架けることの出来ない深淵が横つてゐること。その争闘が前者に取つては實に生死の重大事であるに反して、後者に取つては單に配當の減少に過ぎざること。所謂温情が労働者の人格に對する承認にあらずして、自己の利益に對する冷刻なる打算の結果であること。不徹底なる社會政策は、労働

をも資本をも破産の沼に沈淪せしむること。其他。其他。——苟も「労働」と「資本」との「争闘」を根本的に解決するに必要なすべての豫備知識を、讀者に提供してゐるのである。

而して労働と資本との争闘が、現世界の大きな悩みであるからには、日本もその悩から免かれることは出来ない。所謂特殊の國情や、主従の美德や、温情主義や、協調主義をもつてしては、到底それを解決すべくも無いことは、事實がこれを證據立ててゐる。労働の爲にも資本の爲にも根本的の解決が必要である。然らばその根本的の解決法は始何？——それを明言するの自由は未だ吾々に與へられてゐない。が、それに對する多くの意味深い暗示は、この「争闘」の隨處に發見せられるであらう。

ジョン・ゴルスウオシイには、この「争闘」の外に「銀の箱」、「喜悅」、「長男」、「小さい夢」——これはずつと前に有島武郎氏の翻譯が「白權」に出てゐた——「正義」、「鳩」、「逃亡者」、「暴民」等の脚本、「村莊」、「暗い花」、「資産家」、「友愛」其他の小説がある。

千九百二十年六月

和氣律次郎

争闘

シヨン・ゴルスウオシイ作
和氣律次郎 譯

劇中の人物

ジョン・アンソニー、トレナアサ鍼力會社取締役社長

エドガア・アンソニー、彼の息子、
フレデリック・エツチ・ワイルダア、
ウ井リアム・スカントルベリイ、
オリヴァ・ワンクリン、

同社の取締役

ヘンリー・テンチ、同社の秘書

I フランシス・アンダアウツド、(工學士)同社の支配人

シモン・ハアネス、労働組合の役員

ダヴィッド・ロバアツ、
ゼエムス・ゲリイン、
ジョン・バルギン、
ヘンリー・トマス、
ジョージ・ラウス、

職工委員

ヘンリー・ラウス、
ル井ス、
ヤゴオ、
エヴァンス、
鍛冶屋、
デヴィス、
赤毛の青年、
ブラオン、

トレナアサ鍼力會社の職工

フロスト、ジョン・アンソニーの侍僕

エニツド・アンダアウツド、フランシス・アンダアウツドの妻、ジョン・アンソニーの女

アンニー・ロバアツ、ダヴィッド・ロバアツの女房

マツヂ・トマス、ヘンリー・トマスの娘

ミセス・ラウス、ジョハジ及びヘンリー・ラウスの母親

ミセス・バルギン、ジョン・バルギンの女房

ミセス・ヨオ、職工の女房

アンダアウツド家の小間使

ヤン、マツヂの弟、十歳の子供

罷工者の群集

第一幕、支配人の家の食堂。

第二幕、

第一場 工場に近いロバアツの小家の臺所。

第二場 工場外の空地。

第三幕 支配人の家の客間。

動作は二月七日の正午から午後六時迄の間に、その冬同盟罷工の行はれてゐたイングラントとウェルズの境にあるトレナアサ鍼力工場附近において行はれる。

第一幕

時は正午である。アンダアウッド家の食堂には暖かな火が燃えてゐる。爐の一方には客間に通ずる二重扉があり、他の一方には玄関に通ずる扉がある。室の中央にはテーブル掛の無い長い食卓が會議用の卓として据はられてゐる。その上席の社長席にジョン・アンソニーが着席してゐる、老人で、立派な體格で、綺麗に髻を剃つてゐて、高いカラアを着け、薄い白い頭髮と濃い黒い眉を持つてゐる。彼の動作は稍緩慢で且つ薄弱であるが、彼の眼は非常に生き生きとしてゐる。彼の傍には水の遣入つたコップがある。彼の右手に彼の息子エドガアが着席してゐる、三十前後の眞摯な顔をした男で、新聞を讀んでゐる。彼の次ぎにはロンクリンがある。眉の突き出た、銀色がかつた明るい頭髮の男で、轉寫紙の上に身體を屈めてゐる。秘書のテンチは、背の低い、如何にも控へ目な神經質な男で、頗髭がある、彼は立ちながらロンクリンを手傳つてゐる。ロンクリンの右手には支配人のアンダアウッドが着席してゐる、長い引き締つた顎と扁平とした眼を持つてゐる落ち付いた男である。彼に背を向けてスカントルベリイがある、馬鹿に肥大な、蒼白い、睡むさうな男で、頭髮は胡麻鹽であるが大分禿げてゐる。彼と會長との間には二個の空席がある。

ワイルダア

(瘦せこけて、死人のやうで、口やかましい、垂れ下つた灰色の口髭がある。火の前に立つてゐる。) いや、はや、悪魔みたいな火だ！ 衝立はないかね、テンチ君？

スカントルベリイ

衝立、成程！

テンチ

は、ワイルダアさん。(彼はアンダアウッドの方を見る。それはその——多分支配人の——多分アンダアウッドさんの——)

スカントルベリイ

お宅のこの爐ですがね、アンダアウッドさん——

アンダアウッド

(何か書類を調べてゐたのから顔を上げて。) 衝立ですか？ 成程！ いやどうも。(微かな微笑を浮かべながら扉の方へ行く。) この邊では今時分、火が多すぎると云つて小言を云ふなんてことは無いものです

から。

(彼は齒の間にパイプを噛えてゐるかのやうに、ゆつくりと皮肉な調子で云ふ。)

ワイルダア

(むつきしたらしい口吻で。)職工のことですね。ふむ

(アングアウツド出て行く。)

スカントルベリイ

可哀相に!

ワイルダア

自業自得ですよ、スカントルベリイさん。

エドガア

(持つてゐる新聞を差し出しながら。)職工共は非常に困つてゐると「トレナアサ・ニュース」には書いてありますぜ。

ワイルダア

や、あの畜生! ワンクリンさんに見せてやり給へ。屹度急進論とは一致するだらうから。奴等

は吾々を怪物呼ばはりをしてゐるでせうね。ああいふ怪しからぬ新聞の主筆は銃殺してしまふべきだ。

エドガア

(讀む。)
「若しロンドンに於ける肱掛椅子よりトレナアサ鍼力工場を支配しつつある尊敬すべき紳士より成る重役會が、この罷工中に於ける彼等の職工の一般的實情を、親しく視察すべく出張するだけの恩情を有するならば——」

ワイルダア

で、吾々はやつて來てゐる。

エドガア

(讀み續ける。)
「吾々は、彼等の羊の足の如き心臓も恐らく感動せざるべしとは信ずる能はざるものなり。」

(ワンクリン彼から新聞を取る。)

ワイルダア

悪党め! わたしはあの男が、自分の金と云つては鏹一文も持つてゐなかつた時のことを知つて

ゐる。鼻垂らしの小僧め、自分と意見の合はぬ有らゆる人々を脅喝して、成り上つたのだ。

(アンソニーが何か云ふが聞き取れない。)

ワイルダア

御親父は何んと云はれたのですな？

エドガア

父は『藥罐と鍋』と申したのです。

ワイルガア

ははあ！ (彼はスカントルベリーの隣へ着席する。)

スカントルベリー

(頬をふくらしながら。)衝立が無いとすると、わしは蒸えてしまふ。

(アンダアウツドとエニツドとが衝立を持って這入つて来て、それを火の前に置く。エニツドはすらしりさしてゐる、彼女は小さなきかぬ氣らしい顔をしてゐる、二十八歳である。)

エニツド

もう少し前へ置いて頂戴、フランク。これでよろしう御座いますか、ワイルダアさん？ 宅には

これより高いのは御座いませんが。

ワイルダア

有難う、上等です。

スカントルベリー

(ふり向きながら、喜びの吐息をもつて。)ああ！ 有難う、奥さん。

エニツド

何か御用は有りませんか、お父さん？ (アンソニー頭をふる。)エドガア——用は？

エドガア

』』ペンを貰ひ度いね。

エニツド

スカントルベリーの側に少しありますよ。

スカントルベリー

(ペン先の小函を渡しながら。)ああ！ 兄さんは』』ペンを使はれるのですね。支配人は何を使はれますな？ (飽くまでも懇懇に。)御主人は何を使はれますな、アンダアウツドの奥さん？

アングアウッド

鷺ペン！

スカントルベリイ

鷺鳥の國産品ですな。

(鷺ペンを差し出す。)

アングアウッド

(冷淡に)有難う、一本分けていただけるのでしたら。(一本の鷺ペンを取る。)お晝はどうだねエニツド？

エニツド

(二重扉の處で立ち止つて、振り向きながら。)お晝は客間でいただきますから、ごゆつくり會議をなすつて下さいまし。

(ラン・クリンミワイルダア頭を下げる、彼女は出て行く。)

スカントルベリイ

(我に返つて、不意に。)ああ！ お晝！ あのホテル——やり切れん！ 昨晚白魚をやつて御覽で

したか？ まるで油揚げだ！

ワイルダア

十二時間過ぎた！ 議事録を読まないのかね、テンチ君！

テンチ

(會長の許可を求めながら、速い單調な聲で読む。)『倫敦市中央東部カンノン街五百十二番本社事務所にて一月三十一日開かれたる取締役會において、出席者——會長アンソニー氏、エフ・エッチ・ワイルダア、ウ井リアム・スカントルベリイ、オリヅア・ワンクリン、エドガア・アンソニー諸氏。本社工場の罷工に關する支配人の一月二十日、同二十三日、同二十五日附の書簡を朗讀。支配人宛の一月二十一日、同二十四日、同二十六日、同二十九日附の書簡朗讀。取締役會に對し會見を申込みる中央勞働組合シモン・ハアネス氏の書簡朗讀。ダヴィッド・ロバアツ、ゼエムス・グリーン、ジョン・バルギン、ヘンリー・トマス、ジョージ・ラウス署名の下に、取締役會に對し商議を希望せる職工委員の手書簡朗讀。其結果現場においてシモン・ハアネス氏及び職工委員と事件を協議する目的をもつて、三月七日支配人の居室において臨時取締役會を開催することを決議す。十二通の讓渡書を可決し九通の證書及び一通の貸借對照表に署名捺印す。』

(議事録を社長に差出す。)

アンソニー

(重い吐息と共に。その方がいいのなら、例の通り署名して下さい。)

(彼は吐息をつく、ギョチなくペンを動かしながら。)

ワンクリン

組合はどうしやうてんだね、テンチ君？ まだ職工連と仲直りをしてはるないぢやないか。何んの爲にハアネスはこの會見を申込んだのかね？

テンチ

會社の譲歩を希望してゐるのだらうと思ひます。あの男は今日の午後職工達と會合する筈です。

ワイルダア

ハアネス！ ああ！ 奴は例の冷血冷頭漢の一人だ。わたしは奴等を信用しない。ここ迄出かけて来たのは間違ひだつたかも知れない。職工共は何時に此處へ來るのですかね？

アングアウツド

もう來る筈です。

ワイルダア

ははあ、では吾々の方の用意が出来てないとすると、職工共は待たなくてはなりませんね——少しばかり踵を冷しても別に毒にもなるまい。

スカントルベリイ

(ゆつくりと。)可哀相に！ 雪が降つてゐる。何んて天氣だ！

アングアウツド

(わざとゆつくりした口調で。)この内は、奴等がこの冬中に這入つた一等暖かな内でせうよ。

ワイルダア

何しろこの仕事を早く片付けて六時半の汽車に間に合はせ度いものだ。わたしは明日家内をスベインへ連れて行かなくてはならん。(氣輕に。)わたしの老父は去る六十九年にこの工場のレストランにニ出くはした、丁度こんな二月のことだつた。奴等は親爺を撃ち殺さうとしたのです。

ワンクリン

え！ 禁獵期に？

ワイルダア

勿論、その當時は雇主に對しては禁獵期なんてものは無かつたのです。親爺はピストルをポケットに入れて事務所へ行つたものです。

スカントルベリイ

(少し不安を感じて。)「真面目ではありませんまいな？」

ワイルダア

(斷定的に。)とうとう親爺が、或る職工の脚を撃つたのでしたよ。

スカントルベリイ

(思はず自分の脚にさわりながら。本當ですか？ そりや大變！)

アンソニー

(議事に關する書類を手に取りながら。)罷工に關する取締役會の方針につき考慮すること。

(暫時沈黙。)

ワイルダア

つまりこの忌はしい三角決闘ですな——組合、職工、及び吾々。

ワンクリン

組合は考慮する必要がありますまい。

ワイルダア

わたしの経験によると、何時も組合を考慮しなくてはならないのです、實に忌々しい！ 若し組合が職工の後援を拒絶する位ならば、現にしてゐるやうに、何故彼等は職工にストライキを許したのです？

エドガア

そんなことはもう度々ありましたよ。

ワイルダア

さうかも知らんが、わたしは合點が行かない！ わたしには得心が出来ない。奴等は、技手と火夫との要求は不當だと云つてゐる——確に不當だ——がそれだけでは組合に彼等の援助を拒絶せしめるには足りないのだ。その裏面には何があるのだ？

アンダアウツド

ハアバアやタインウエルの工場にストライキの起る恐れがあるのです。

ワイルダア

(勝ち誇つて。)他のストライキを恐れてゐる——さてこそ、それが理由なのだ。何故そのことを今迄聞かしてくれなかつたのです？

アングアウツド

お聞きになつた筈です。

テンチ

あなたは當日取締役會を缺席されました。

スカントルベリイ

職工共も組合に見放されたら全く見込みのないことを悟らなくてはならない筈だ。それは狂氣だ

アングアウツド

それはロバアツです！

ワイルダア

吾々にとつては却つて好都合だ、職工共がロバアツのやうな氣違ひじみた煽動者を首領に擔いだのは。(間。)

ワンクリン

(アンソニーの方を見ながら。)で？

ワイルダア

(せかせかと口を入れて。)例の通りの騒動さ。わたしは吾々の現在の状態が氣にくはん。わたしはそれが氣にくはん。わたしは、もう久しい以前からさう云つてゐるのだ。(ワンクリンを見ながら。)ワンクリン氏とわたしとがクリスマススの前に此處へ來た時には、職工共は屈服せざるを得ない形勢だつた。あなたの御意見もさうでしたね、アングアウツドさん。

アングアウツド

さうです。

ワイルダア

處が、更に屈服しない！で吾々は今愈々窮境に陥らうとしてゐる——得意は無くなる——株下る！

スカントルベリイ

(頭をふりながら。)まあ！まあ！

ワンクリン

このストライキの損害はどの位だね、テンチ君？

テンチ

五萬磅以上です！

スカントルベリイ

(心を痛めて。) いや、はや！

ワイルダア

とても回復は出来ない。

テンチ

さうです。

ワイルダア

職工共がこんな頑強に持ちこたへやうとは誰も思はなかつた、——誰もそれを云つてはくれなかつた。(苦々しげにテンチを見ながら。)

スカントルベリイ

(頭をふりながら。私は元から喧嘩は嫌ひさ——今後も嫌ひさ。)

アンソニイ

降服はいかん！ (一同彼を眺める。)

ワイルダア

誰が降服しようと思ふのです？ (アンソニイ彼を見る。) わたしは——わたしは道理によつて行動したいのです。職工共が去る十二月にロバアツを取締役會へ寄越した時——あの時が好い汐時だつたのだ。吾々は彼の機嫌を取らなくてはならなかつたのだ。然るに社長は——(アンソニイの眼に會ふ。彼の眼を伏せる。)—いや——吾々は彼を首にしてしまつた。その當時吾々は、少しの策略を用ひたら彼等を説服することが出来たのだ。

アンソニイ

妥協はいかん！

ワイルダア

そこで！ このストライキは十月から今迄續いてゐる、而かもわたしの見る處では今後尙六個月は續きさうだ。さうなれば吾々は一層ひどい窮境に陥るに違ひない。唯一の心やりは、職工共は更に一層ひどいことになるといふことだ！

エドガア

(アングアウツドに) 實際どんな状態なのだね、フランク君？

アングアウツド

(何等の表情なしに。) 言語道断さ！

ワイルダア

然し他からの援助なしに斯んなに持ちこたへるだらうと誰が考へたものがあるだらうか！

アングアウツド

彼等を知つてゐる者だけでせう。

ワイルダア

奴等を知らうとする人間は阿呆だ！ それに錫はどうだ？ 値段は日に日に上つてゐる。愈々仕事を始める段になつたら、最高の相場で従來の契約を履行しなくてはならん。

ワンクリン

それに對する御意見は如何でせうな、社長？

アンソニー

止むを得ませんな！

ワイルダア

とても當分利益配當の見込みはない！

スカントリベリイ

(力を籠めて。) 株主のことを考へなくてはなりませんね。(重々しく振り向きながら) 社長、私は株主のことを考へなくてはならないと思ひますが。

(アンソニー何かを呟く。)

スカントリベリイ

何んですつて？

テンチ

社長は、あなたのことを考へてゐると云はれます。

スカントリベリイ

(まごつきながら) 皮肉屋！

ワイルダア

いや笑談ではない。社長はいいかも知らんが、わたしは何年も無配當で辛抱は出来ん。吾々は會社の繁榮をもつて水切り遊びをする譯にはいかん。

エドガア

(稍氣まり悪るさうに。)然し職工達のこと考へなくてはなるまいと思ひますね。

(アンソニー以外の人々は皆ちぢもぢする。)

スカントルベリイ

(吐息をついて。)吾々は個人的の感情を考へてはならないのですよ、君。それはいけないのです。

エドガア

(皮肉らしく。)わたしは吾々の感情を考へてはるらないのです。わたしは職工達の感情を考へてゐるのです。

ワイルダア

それについては——吾々は實業家ですからね。

ワンクリン

それはたいしたことではない。

こんなに甚しい苦難を無視してまで事件を斯んなに切迫せしめる必要はない——それは——それは残酷だ。

エドガア

(誰も口を開くものが無い、何人も彼の自尊心を重んずるものは、その存在を承認したくない或物をエドガアが暴露したかのやうである。)

ワンクリン

(皮肉な微笑をもつて。)わたしは、吾々の方針を人情などといふ奢侈の上に置いてはならないと考へる。

エドガア

わたしには現在の状態が甚しく不愉快なのです。

アンソニー

吾々は争ひを求めはしなかつたのだ。

エドガア

それは存じてゐます、が少しやり過ぎたやうです。

アンソニー

いいや。

(一同互に顔を見合はす)

ワンクリン

奢侈云々は別問題として、社長、吾々は今後の行動について考へて見なくてはなりませんね。

アンソニー

一度職工に譲歩したら際限がありませんぞ。

ワンクリン

全く其通りです、然し——

(アンソニー、頭をふる。)

あなたはそれを動かすべからざる主義の問題だとせられるのですね？

(アンソニーうなづく。)

それも奢侈ですよ、社長！ 株は額面以下ですからね。

ワイルダア

左様、そして次期の配當がきまつたら半値に下るでせう。

スカントルベリイ

(驚愕して。)まあ、まあ！ まさかそんなこともありますまいて。

ワイルダア

(冷淡に。)今に分ります！ (アンソニーの言葉を聞き取らうと頭を延ばしながら。)わたしには聞き取れないが——

テンチ

(躊躇しながら。)社長は、"Fais que — que — devra —"

エドガア

(鋭く。)父は斯う云つたのです、『吾々のすべきことをして——事件は成行きに委かすまでだ』と。

ワイルダア

へへえ！

スカントルベリイ

(両手を挙げながら。)社長はストイックだ——社長はストイックだと私は前から云つてゐるのだ。

ワイルダア

それが少なからず吾々の役に立つだらう。

ワンクリン

(慇懃に。)眞面目な處、社長、あなたは自分の船を沈没させるお積りですか、あの——主義とかの偽に？

アンソニー

沈没はしない。

スカントルベリイ

(驚愕して。)わたしが乗つて居る間は沈没しないやうにして貰ひたい。

アンソニー

(目ばたきして。)立派な鼠だな、スカントルベリイ君。

スカントルベリイ

何んで男だ！

アンソニー

わしは何日も職工共と戦つて來た、わしは一度だつて負けたことはない。

ワンクリン

吾々も理論においてはあなたに賛成です、社長。然し吾々すべてが鑄鐵製ではありませんからね。

アンソニー

吾々は唯持ちこたへなくてはならない。

ワイルダア

(立つて火の方へ行きながら。)そして全速力で破滅するのだ！

アンソニー

負ける位なら破滅した方がまだ！

ワイルダア

(いらいらしながら。)それはあなたのお氣には召すだらうが、わたしはマツピラだ、外の諸君も皆さうだらうと思ふ。

(アンソニー彼の顔を見る——沈黙。)

エドガア

わたしにはどうしたらこれを切り抜けて行けるのか分らない、現状を維持することは職工の女房や家族を餓死せしめることだ。

(ワイルダアは急に火の方へ向く、スカントルベリイは其考を拂ひ除けやっ手差し出す。)

ワンクリン

わたしにはそれは少しセンチメンタルに思はれますね。

エドガア

實業家は不常でもいとおつしやるのですね？

ワイルダア

わたし位職工に同情してゐる者はあるまい、然し若し彼等が(自ら勵しながら)こんなに頑強な者共であるなら、吾々には手の付けやうがない。吾々は自分達のことや株主のことを考へるだけで随分忙しいのだから。

エドガア

(むかむかしながら。)一期や二期配當が無くつたつて株主は死にはしません、それが職工を苦しめる理由にはならないと思ひます。

スカントルベリイ

(甚だしく不安げに。)君は配當を何んでもないやうに云はれますね。わたしには吾々の立場が分り兼ねる。

ワイルダア

それに對する正常な見方は一つしかない。吾々はこのストライキで吾々を滅ぶがままにして置く譯にはいかない。

アンソニー

屈服はいかん！

スカントルベリイ

(絶望の仕草をもつて。)あれを見給へ！

(アンソニーは彼の椅子に身をそらしてゐる。一同彼を見守る。)

ワイルダア

(自分の席に復しながら。)いや、若し社長がさういふ御意見なら、吾々は一體何んの爲に此處まで出かけて來たのか、それがわたしには分らん。

アンソニー

職工に吾々は一步も譲歩せんといふことを云ふ爲だ——(冷淡に。)奴等は、明白な英吉利語で云つて聞かしてやらないと、それを信じないからです。

ワイルダア

ふむ！ 若しあのロバアツといふ畜生が、全く同じ考で吾々を此處までおびき寄せたとしても、そんなに驚きはしないのだ。わたしは不平を云ふ男は嫌ひだ。

エドガア

(腹立しげに。)吾々は彼の發見に對して充分の報酬を與へてゐないので。わたしは其當時からさう云つてゐるのです。

ワイルダア

吾々は三年後に五百磅と二百磅の賞與とを與へた。若しそれで不足だといふなら！ 一體どうしてくれると云ふのだ？

テンチ

(唾願するやうに。)會社は彼の頭腦によつて十一萬から儲けた、そして七百だけくれた——あの男

はさういふ風なことを云つてゐるのです。

ワイルダア

あの男は飛んでもない煽動者だ！で、わたしは組合を好かん。然しハアネスが此處へ来る筈だから、事件を彼に委すことにしやうではありませんか。

アンソニー

いや、いかん！ (再び一同彼を見る。)

アンダアウツド

ロバアツは、職工共にそれに同意させますまい。

スカントルベリイ

狂信者だ！ 狂信者だ！

ワイルダア

(アンソニーを見ながら。)而かも一人ではない！

(フロストが玄關から這入つて来る。)

フロスト

(アンソニーに。)組合のハアネス氏が待つてをられます。職工達も参つてをります。

(アンソニーうなづく。アングアウツド扉の處へ出迎へてハアネスを案内して来る。彼は色の蒼い、頬のこけた、髯を綺麗に剃つてゐる男で、眼は鋭く、顎は細い——フロストは出て行く。)

アングアウツド

(テンチの椅子を指しながら。)社長の隣へお掛け下さい、ハアネス君、どうぞ？

(ハアネスが這入つて来る。同時に、取締役達は一團となり、丁度大に對する家畜のやうな態度で彼の方へ向く。)

ハアネス

(四邊をきつと見廻して會釋をする。)有難う！(着席する。彼の聲は少し鼻にかかる。)さて紳士諸君、やつと仕事に取り掛ることにになりましたね。

ワイルダア

その仕事といふ言葉の意味によりけりですよ、ハアネス君。なぜ君は職工共を讓歩させないのです？

ハアネス

(冷笑的に。)職工の方があなたの方よりも遙かに正當ですよ。吾々の問題は、再び彼等を援助すべきか否かなのです。

(彼はアンソニー以外の人を無視して、アンソニーに向つてのみ話しかける。)

アンソニー

援助するならするがいい。吾々は自由労働を採用して、それに對抗するから。

ハアネス

それは駄目です、アンソニーさん。自由労働は得られません、御存知の筈です。

アンソニー

見てゐて貰ひませう。

ハアネス

私は全く腹藏のない處を申上げてゐるのです。吾々は、あなたの社の職工を援助することを差し控へなくてはならなかつたのです、それと云ふのが彼等の要求の一部が一般の賃銀率に比して過大だつたからです。私は今日彼等に、其要求を撤回せしめる積りです。で若し彼等がそれを撤回するなら、今直接申し上げて置きますが、吾々は即刻再び彼等を援助する筈です。それで、私は今夜歸

るまでに何等かの解決を見たいと思つてをります。いい加減で、この古風な綱引きは止しにしようではありませんか？ あなた方にどれだけの利益があるのです？ 何故あなた方は、これを限りに是れ等の者共もあなた方と同じ人間であるといふこと、及びあなた方に取つて善いものをあなた方が求めると同じやうに、彼等も彼等に取つて善いものを求めるといふことを承認しないのです——（きびしく。）あなた方の自動車、シヤンパン、八種の御馳走。

アンソニー

若し職工共が折れて出れば、何んとか色は付けてやる積りです。

ハアネス

（皮肉に。あなたもさう云ふ御意見ですか、あなたは——あなたは——あなたは？（取締役達は返事をしない。）私に云はせると、それは如何にも尊大な貴族的口吻ですな、さう云ふ時代は過ぎ去つたと思つてゐるが——私の考へ違ひらしい。

アンソニー

それは彼等の慣用する口吻だ。どちらが長く持ちこたへるか、やる處までやるまでだ——吾々から離れた彼等か、彼等から離れた吾々か。

ハアネス

實業家としてあなた方が、この力の浪費を恥ぢないのを私は怪しむものです。あなた方は、結局どうなるかを御存知の筈だ。

アンソニー

何んだな？

ハアネス

妥協です——何時だつてさうです。

スカントルベリイ

君は職工達に、彼等の利害と吾々の利害とは同一だといふことを説得する譯には行かないのですかね？

ハアネス

（振り向きながら、皮肉に、）そりや説得することは出来ます、若し本當にさうならば。

ワイルダア

まあまあ、ハアネス君、君は利巧な人だ、君は近頃喧ましい社會主義的の俗論などを信じはしな

い。彼等の利害と吾々の利害とは實際相反してはゐないよ。

ハアネス

極く簡単な、ちよつとした事をお尋ねしたいのですがね。あなた方は職工に、今あなた方に拂はせてゐるより一ペニイだけ餘計に拂つてやつていただけないでせうか？

(ワイルダア黙つてゐる。)

ワンクリン

(跋を合せて。)必要以上に支拂はないのが商賣のイロハだと私は考へるが。

ハアネス

(皮肉に。)さうです、それが商賣のイロハださうです。そして商賣のイロハがあなた方の利益と職工の利益との間に存在してゐるのです。

スカントルベリイ

(囁きながら。)何んとか協定しなくては。

ハアネス

(冷然と。)では皆さん、取締役會は少しも讓歩しないのだと承知してもよろしいのですな？

(ワンクリンとワイルダア再び前へ乗り出して何か云はさうして、止める。)

アンソニイ

(うなづきながら。)斷じて。

(ワンクリンとワイルダア再び前へ乗り出す、又スカントルベリイは出、拔げに喉を鳴らす。)

ハアネス

何か云はうとなすつたやうですが？

(スカントルベリイは黙つてゐる。)

エドガア

(不意に仰向いて。)吾々も職工の状態には同情に堪へないのです。

ハアネス

(冷やかに。)職工はあなた方の同情に用はないのです。彼等の求むる處は正義です。

アンソニイ

それなら彼等自身を正しくするがいい。

ハアネス

その正しくといふ言葉は『卑しく』と訂正すべきでせう、アンソニーさん。なぜ彼等は自ら卑しくしなくてはならないのです？ 金銭の偶然的事情は別として、彼等はあなた方と同じやうに善良な人間ではありませんか？

アンソニー

何を馬鹿な！

ハアネス

成程、わたしは亞米利加に五年間ゐました。それは人間の思想に色彩を施すのです。

スカントルベリイ

(不意に、云はずにしまつた喉音を取り返へさうとするやうに。) 職工達を此處へ通して、彼等の言ひ分を聴かうではありませんか！

(アンソニーうなづく、アングダアウツド一重の扉から出て行く。)

ハアネス

(冷淡に。) わたしは今日の午後彼等と會見することになつてゐますから、それが済むまで最後の決定を延期していただきたいと思ひますが。

(再びアンソニーうなづく、そしてコップを取り上げて呑む。)

(アングダアウツドが再び這へて来る) ロバアツ、グリーン、バルギン、トマス、ラウスその後に従ふ。彼等は順に這入つて来て、帽子を手に持つたまま、ズバリと並んで黙つて立つてゐる。ロバアツは瘦せて中背で、少し猫背である。彼はちよつぱりした褐灰色の鬚と口髭を蓄え、頬骨は高く頬ほこけ、小さな爛々たる眼を持つてゐる。彼は古い脂染みた青色のセルの服を着け、古い山高帽を手にしてゐる。彼は社長に最も近く立つ。彼の次ぎなるグリーンは綺麗なやつれた顔をしてゐて、小さな灰色の山羊髭だらり下垂れた口髭を蓄え、鐵縁の眼鏡を掛け、穩和な率直な眼をしてゐる。彼は古びた緑色になつてゐる外套を着て、リネンのカラアを付けてゐる。彼の次ぎにはバルギンがゐる、背の高い頑丈な男で、濃い口髭と角ばつた顎を持つてゐて、赤い頸巻をしてゐる、そして絶えず烏打帽を片手から片手へ持ち換はつてゐる。彼の次ぎにはトマスがゐる、灰色の口髭と顎一杯に髯を生やした老人で、雨風に曝された骨ばつた顔をしてゐる、其外套は瘦せた剛情らしい顎を現はしてゐる。彼の右手にラウスがゐる、五人中の最年少者で、兵卒のやうである、彼は死ぬ見て来たといふやうな眼をしてゐる。

アングダアウツド

(指しながら。) 壁の處に椅子があるぜ、ロバアツ、あれを持つて来て掛けたらいいだらう？

ロバアツ

有難う、アンドアウッドさん、吾々は立つてをりませう——重役方の前ですから。(彼はきびしい断音的の口調で話す、rの音を強く響かせ、aの音を併太利語のaのやうに發音する、彼の子音は短かく齒切れがいい。)今日は、ハアネスさん？ 午後までは、お目にかかれやうとは思ひませんでした。

ハアネス

(確乎と。)あとでもう一度お目にかからう、ロバアツ君。

ロバアツ

いや結構です。組合への土産話がありますよ、屹度。

アンソニー

お前達は何んの用だ？

ロバアツ

(辛辣に。)失禮ながら、社長のおつしやることはよく分りかねますが。

ナンチ

(社長の椅子の後方から。)社長は諸君の言ひ分を聞かうと云はれたのです。

ロバアツ

吾々は重役方の言ひ分を聞く爲に伺つたのです。重役から先づ始めていただきます。

アンソニー

重役は別に云ふことは無い。

ロバアツ

(職工達を見渡しながら。)さうならば吾々は重役の御邪魔をしてゐるやうです。吾々は早速この立派な敷物から足をどけることにしませう。

(彼は行きかける、職工達は催眠術をかけられたやうに、靜かに動く。)

ワンクリン

(柔和に。)まあ、まあ、ロバアツ、君はそれだけのことを云ふ爲に、吾々にこの遠い寒い旅をさせたのではあるまい。

トマス

(純粹のウエルス人)いや、で、わしはその——

ロバアツ

(きびしく。)云ふがいい、ヘンリー・トマス、云ふがいい。君は重役方に——俺よりも旨く話が出るのだから。

(トマス黙つてゐる。)

テンチ

社長はね、ロバアツ君、君達が會見を求めたのだから、重役會は先づ君達の云ひ分を聞かうと云はれたのだよ。

ロバアツ

よろしい！ 若し職工側の云ひ分を皆んな話し出さうものなら、とても今日中には済まないでせう。そしてロンドンの宮殿を離れなかつたらよかつたと思はれる方も出来るに違ひないのです。

ハアネス

君達の提議は何んだ？ 條理に外れてはいかんぜ。

ロバアツ

條理を求められるのですね、ハアネスさん？ この午後集まる前に視察して御覽なさい。(彼は職工達を眺める、彼等は静まり返つてゐる。屹度素晴らしい光景が目につきますから。)

ハアネス

よろしい、諸君、俺を胡麻化すのではあるまいね。

ロバアツ

(職工達に。)吾々はハアネスさんを胡麻化しはしないね。お晝にシヤムバンをお上りなさい、ハアネスさん、その必要がありますよ。

ハアネス

さあ、用事にかかり給へ、諸君！

トマス

わし共の要求してゐるのは、ただ正義だけなのです。

ロバアツ

(毒々しく。)ロンドンから正義？ 何を云つてるんだ、ヘンリー・トマス？ 君は馬鹿になつたのか？(トマス黙つてゐる。)吾々は吾々が何んであるかをよく知つてゐる——満足しない犬だ——決して満足しない。社長はロンドンで俺に何んと云はれた？ 俺には自分の云つてることが分つてゐないと云はれたのだ。俺は馬鹿な無教育な人間で、職工の要求を知らないで話してゐたといふのだ。

エドガア

問題から離れないやうにして貰ひたいね。

アンソニー

(手を舉げて。)主人は一人しかないのだ、ロバアツ。

ロバアツ

さうならば、吾々が主人になるのです。

(沈黙。アンソニーとロバアツと互ひに見詰め合ふ。)

アンドアウツド

若し君が重役に云ふことがないなら、ロバアツ、グリーンかトマスに代りに云はしたらどうだね。

(グリーンとトマス氣遣はしげにロバアツを見、互ひに顔を見合せ、更に他の人々を見る。)

グリーン。

(英吉利人。)重役方に聞いていただけるのでしたら——

トマス

わしの申上げることは、皆んなが申上げたいことなんで——

ロバアツ

勝手に喋べれ、ヘンリー・トマス。

スカントルベリイ

(甚だしい精神的不安の仕草と共に。)氣の毒な人達の靈魂は自分達のものにして置いてやれ!

ロバアツ

大丈夫です、靈魂は自分のものです、あなた方は奴等に身體らしい身體をさせては置かないのですから、(其言葉が罪過でもあるかのやうに、きびしい強い口調で。)スカントルベリイさん!(職工達に向つて。)で、君達が話すか、それとも俺が君達の代りに話さうか?

ラウス

(不意に。)話し給へ、ロバアツ、でなきやあ外の者に話をせ給へ。

ロバアツ

(皮肉に。)難有う、ジョージ・ラウス。(アンソニーに向つて話しかけながら。)社長及び重役は吾々の主張を聴取すべく、ロンドンから遙々と此處へ出張するの光榮を、吾々に與へられた。で、これ以

上重役方をお待たせするのは禮儀でないと考へます。

ワイルダア

いや、それも神様のおかげだ！

ロバアツ

私の云ふことをしまひ迄聞きになつたら、ワイルダアさん、いくらあなたが信心家でも神に感謝はせられますまい。恐らくロンドンにゐるあなたの神は、労働者の言葉に耳をかす暇はありませんまい。何んでもそれは金のある神だといふことだ、が若し其神がわたしが其神に話すことを聞いたら、屹度ケンシントンで勉強したより以上のことを知るに違ひない。

ハアネス

おい、ロバアツ、君にも自分の神がある。他人の神をも尊敬しなくては。

ロバアツ

そりや、おつしやる通りです。吾々は此處では他の神を持つてゐます、それはワイルダアさんのとは大分違つてゐるやうです。ヘンリー・トマスに訊いて御覽なさい、あの男なら其神とワイルダアさんののが同じかどうか話すでせう。

(トマス手を挙げ頭を前へ述べす、預言せんとするかのやうに。)

ワンクリン

お願いだから問題から離れないやうにしやうぢやないか、ロバアツ。

ロバアツ

わたしはそれが問題だと思ふのです、ワンクリンさん。若しあなたが、「資本の神」に「労働」の街を歩かせ、注意して視察させることが出来るなら、あなたはわたしの思つてゐるよりも遙かに利巧な方だ、それでこそあなたは急進派だ。

アンソニー

わしに云へ、ロバアツ！ (ロバアツ黙つてゐる。) 君は此處で職工を代表してゐる、わしは此處で重役會を代表してゐるのだ。

(ゆるゆると回邊を見廻す。)

(ワイルダア、ワンクリン及びスカントルベリイ不安らしく身軀を揺らす、エドガアは扉の方を見詰めてゐる。ハアネスの顔には幽かな微笑が浮ぶ。)

で、どうだといふのだ？

ロバアツ

承知しました！

(以下の出来事の間、彼ミアンソニイは互ひにきつみ顔を見合はしてゐる。職工達も重役達も制してゐる不安を種々の方法で現はす、丁度彼等自身なら決して口にしなと思はれる言葉を聞いてゐると云つた風である。)

職工達はロンドンへ出掛けて行くだけの資力がありません、又意見を認めたものをあなた方が信用してくれやうとも思つてゐないので、彼等は郵便がどんなものであるかを知つてゐる。彼はチラミアンダアウツドミテンチミを見る。又重役會がどんなものであるかも知つてゐる。「支配人に照會すること——職工の状態につき支配人の意見を聴取すること。今少しく彼等を搾取し得るや否や？」

アンダアウツド

(低い聲で。)不當なことを云つてはいかん、ロバアツ！

ロバアツ

果して不當でせうか、アンダアウツドさん？ 職工達が知つてゐます。わたしがロンドンへ出かけて行つた時、わたしはあなた方に正直に事情をお話ししました。其結果はどうでした？ わたし

は自分の知らないことを話してゐるのだと云はれたのです。わたしはモウ一度さう云はれにロンドンへ出かけて行くだけの資力がありません。

アンソニイ

職工の爲に云ひ度いことは何んだ？

ロバアツ

わたしはこれを云ひ度いのです——そして何よりも先づ彼等の状態です。あなた方は支配人の處へ行つてお聞きになるまでも有りません、あなた方はモウこれ以上彼等を搾取することは出来ません。吾々は一人残らず殆んど餓死しやうとしてをります。(職工達の中から驚きの囁きが起る。ロバアツ「廻す。’)わたしが何んの爲にそれを云ふのか怪しんでをられるやうですな？ 吾々は一人残らず窮迫に瀕してゐます。この數週間位生活に困難したことは曾てありません。待つてゐれば今に吾々が譲歩するに違ひないと考へてはいけません。吾々はそれ迄に斃れてしまひます、吾々すべてがでず。で職工達は、あなた方が彼等の要求を容れて下さるか否か最後の回答を聞く爲に吾々を寄越したのです。例の書類は祕書が持つてゐられるやうです。(テンチもぢもぢする。)それですな、テンチさん。そんなに大きくはない。

テンチ

(うなづきながら)さうです。

ロバアツ

その書類には唯の一行も、吾々に無くていいことは書いて無いのです。

(職工達ざわつく。ロバアツきびしく彼等をふり返へる。)

さうだらう？

(職工達不承不承同意する。アンソニイはテンチから書類を取つて熟讀する。)

唯の一行もです。それらの要求は全部正當です。吾々は要求する権利の無い何物をも要求しては
 るないのです。わたしがロンドンで云つたことを、わたしは再び此處で云ひます、其書類には一個
 の正當な人間が要求してはならないことは唯の一つもありません、そして正當な人間はそれを與へ
 なくてはならないのです。

アンソニイ

この書類にある一つの要求も吾々は與へない積りだ。

(これらの言葉と共に起つた動搖中ロバアツは重役達をアンソニイは職工達を見守る。ワイルダア出、設け

に席を立つて火の處へ行く。)

ロバアツ

さういふお考へですか？

アンソニイ

さうだ。

(火の前におるワイルダアこれはたまらぬいふやうな強い仕草をする。)

ロバアツ

(それを見て、冷然たる緊張をもつて。) あなた方は、會社の状態が職工の状態より果して善いか否か
 を最もよく知つてゐられる筈だ。(重役達の顔をじろじろ眺めながら) あなた方はあなた方の壓制に堪
 へるか否かを最もよく知つてゐられる筈だ——が、これだけのことを申上げて置く、若しあなた方
 が、職工が僅か一時ほどでも退却するとお考へになると、それこそ飛んでも無い大きな間違をされ
 ますから。(彼はきつミスカントルベリイを見守る。) あなた方は組合が吾々を援助しないからと云つて
 ——何んて組合だ！——吾々が早晚あなた方の前に降伏すると考へてゐられる。あなた方は職工
 達は女房や家族のことも考へなくてはならないから——一週間か二週間の問題だと考へてゐられ

る——

アンソニー

若し君がそんなにまで吾々の心事を忖度しないであらうと思ふが。

ロバアツ

左様！ それは別に吾々の利益ではない！ わたしはこれだけのことを申し上げます、アンソニーさん——あなたはあなた御自身の心を知つてゐられる！（アンソニーを見詰めるが）わたしはあなたを信頼することが出来る！

アンソニー

（皮肉に。）いや、どうも難有う！

ロバアツ

で、わたしはわたしの心を知つてゐる。私は、このことを申上げる。職工達は女房や家族を國家が養つてくれる處へやります、そして彼等は降伏する前に餓死します。わたしは、アンソニーさんあなたの会社に起り得る最大の凶事に對して準備せられんことを忠告します。吾々はあなた方が考へていらつしやるほどには無智ではありません。吾々は輿論の趨勢を知つてゐます。あなた方の立

場は決して以前のやうではありません——いいえ決して！

アンソニー

吾々の立場は吾々自らに判断させて貰ひ度いものだ。歸つて自分の立場を考へ直すがいい。

ロバアツ

（前へ踏み出しながら。）アンソニーさん、あなたはモウ若い人ではない。わたしが物心付いた時分からあなたは工場へ這入つて来るすべての職工の敵だつた。わたしはあなたを卑しい人だとも残酷な人だとも云はない、があなたは、職工達が彼等自身の運命に關しての主張に決して耳をかさうとしなかつた。あなたは四度彼等に打勝つた。わたしはあなたが戦争好きだといふことを聞いてゐる——はつきりと申上げて置くが——あなたはあなたの戦ふ最後の戦争をしてゐるのだ——

（テンチ、ロバアツの袖を引張る。）

アングアウツド

ロバアツ！ ロバアツ！

ロバアツ

ロバアツ！ ロバアツ！ わたしはわたしの考を社長に云つてはいけない、が社長は社長の考を

わたしに云つてもいいのだ！

ワイルダア

一體どういふことになるのだらう？

アンソニー

(ワイルダアを冷笑しながら。)云ふがいい、ロバアツ、何んでも云ひ度いことを云ふがいい！

ロバアツ

(間を置いて。)もう云ふことはありません。

アンソニー

重役會は五時までは引續き開かれてゐるのだから。

ワンクリン

(小さな聲でアンダアウッドに。)こんな風ではとても何事もきまりはしない

ロバアツ

(辛辣に。)吾々は社長と重役會との清聴を煩したことを感謝します。

(彼は扉の方へ行く、職工達は茫然としてかたまつてゐる、わがてラウスは頭を擧げてロバアツをすり抜け

て出て行く。他の人達もこれに従ふ。)

ロバアツ

(扉に手をかけながら—憎々しげに。)さようなら、重役諸君！ (出て行く。)

ハアネス

(皮肉に。)わたしは諸君が示された和解的精神を慶賀します。諸君のお許しを乞ふて、わたしは五時半に亦お目にかかりませう。さようなら！

(彼は軽く會釋して、アンソニーに眼を向ける、アンソニーは平然として彼を見返へす、彼はアンダアウッド

ドに送られながら出て行く。暫時不安な沈黙がある。アンダアウッド再び扉の處に姿を現はす。)

ワイルダア

(強い嫌悪をもつて。)どうだね！

(二重扉が開かれる。)

エニツド

(戸口に立ちながら。)お晝の仕度が出来てをります。

(エドガア急に立ち上つて妹の側を通り抜けて出て行く。)

ワイルダア

お晝をやらうぢやありませんか、スカントルベリーさん？

スカントルベリー

(重々しく立ち上りながら)結構、結構。それだけですからな、吾々のやれるのは。

(彼等は二重扉から出て行く。)

ワンクリン

(小さな聲で。)本當に最後まで闘ふお積りですか、社長？

(アンソニーは答へない。)

ワンクリン

お氣をお付けなさい、物事の秘訣は留るべき時期を知ることです。

(アンソニーは答へない。)

ワンクリン

(非常に嚴肅に。)この道に災禍が横つてゐるのです。昔のトロイ人等は、あなたのお父さんには愚人だつたのです、アンダアウツドの奥さん。

(二重扉から出て行く。)

エニツド

あたしお父さんにお話し度いことがあるの、フランク。

(アレダアウツドはワンクリンの後から出て行く、テンチは卓の周圍を廻りながら取り散らがつたメンや書類を片付ける。)

エニツド

いらつしやらないの、お父さん？

(アンソニー頭をふる。エニツドは意味ありげにテンチを見る。)

エニツド

あちらでお晝を召上れな、テンチさん？

テンチ

(書類を手にして。)有難う御座います！ 奥さん、有難う御座います！

(見返りながら靜かに出て行く。)

エニツド

(扉を締めながら)何んとかきまりましたのでせうね、お父さん！

アンソニー

いいや！

エニツド

(甚だしく失望して)あら！ どうもなさらなかつたの？

(アンソニー頭をふる。)

エニツド

フランクの話では職工達は皆んな妥協しやうと思つてゐるんだといふぢやありませんか、あのロバアツ以外の者は？

アンソニー

わしはせん！

エニツド

あたし達の立場は本當に恐ろしいやうですわ。若しお父さんが支配人の妻で、此處に住んでいら

しつて、すべてのことを御覽になつたら。それこそ本當にはなさらないわ、お父さん！

アンソニー

どうかな？

エニツド

あたし達は困つてゐる有様を残らず見てゐるのですわ。内の女中だつたアンニイを覚えていらつしやるでせう、ロバアツと結婚した？ (アンソニーうなづく。) もう本當に可哀相なのですよ、アンニイは心臓が弱いんですの、それなのにストライキが始つてからは食物さへ碌には喰べてゐないんですわ。あたしチャンと知つてゐますの、お父さん。

アンソニー

入るだけのものをやりなさい、氣の毒な！

エニツド

ロバアツはあたし達から物を貰ふことを許さないんですの。

アンソニー

(前を見詰めながら)職工共の剛情に對する責任は無いからな。

エニツド

職工達は皆んな困つてゐるのですわ。お父さん！ 止して頂戴、あたしの爲に！

アンソニー

(きつと彼女を見ながら)お前には分らないのだよ。

エニツド

若しあたしが重役だつたら、何とかするんだけど。

アンソニー

どうするな？

エニツド

譲歩したくないといふのが理由なのですわ。それは全く――

アンソニー

え？

エニツド

全く不必要ですわ。

アンソニー

お前に必要なことが分つてゐるだらうか？ 小説を読んだり、音楽の稽古をしたり、話したりするのは勝手だが、こんな争闘の底に何が存在するかをわしに説法しやうとするのは止して貰ひ度いな。

エニツド

あたし此處に住んで、それを實見してゐるんですもの。

アンソニー

お前達の階級と、お前がそんなに同情してゐるあの職工達との間に何が存在すると思ふかね？

エニツド

(冷やかに)どういふ意味ですか分りませんわ、お父さん。

アンソニー

四五年後には、お前もお前の子供達も現在の奴等と同じ状態に落ちてしまうのだ、事物の真相を見るの明があり且つ自立することの出来る脊骨がある人間以外の者はだ。

エニツド

あなたは職工達の現状を御存知ないのですわ。

アンソニー

わしはよく知つてゐる。

エニツド

いいえ知つてはいらつしやいません、お父さん。若し知つていらつしやるのだつたら、あなたは決して――

アンソニー

お前が現在の實狀を知らないのだ。若しお前と労働者の絶えざる要求との間に誰も立つてゐなかつたら、お前はどんな慈悲を與へられると思ふかね？ マアかういふのだな――（手を喉にやつて絞める仕草をする。）先づ第一、お前の感情が失はれる、次ぎには教養、それから又お前の安樂は絶えず失はれて行くのだ！

エニツド

あたしは階級間の障壁なんてことを信じませんわ。

アンソニー

お前は――階級間の障壁を――信じない？

エニツド

（冷やかに。）それに又あたしには、それがこの問題とどんな關係が有るのか分かりません。

アンソニー

お前に分るやうになるには一代も二代もかかるだらう。

エニツド

それはあなたとロバアツとです、お父さん知つていらつしやる筈です！

（アンソニー下唇を突出す。）

それが會社を倒してしまうのです。

アンソニー

その判断はわしに委して貰ひ度いな。

エニツド

（口惜しきうに。）あたしはアンソニー・ロバアツがこんなに難儀してゐるのを、黙つて見てはゐられません！ 子供達のことを考へて下さい、お父さん！ あたし、はつきり申上げて置きます。

アンソニー

(冷淡な微笑を浮べて。)何をしようと云ふのだな?

エニツド

構はないで下さい。

(アンソニー黙って彼女を見る。)

エニツド

(やさしい口調で、彼の袖をさすりながら。)お父さん、あなたはこんなに氣をお使ひなすつてはいけないのを知つていらつしやるでせう——フィツシヤア先生の云はれたことを知つていらつしやるでせう!

アンソニー

老人といふものは婆さんのいふことを聞いてはゐられないものだ。

エニツド

でもちう充分なすつたではありませんか、本當にそれがお父さんの主義だとしても。

アンソニー

さう思ふかね?

エニツド

止して頂戴、お父さん!(彼女の顔に興奮する。)あなた——あなたはあたし達のことも考へて?

アンソニー

考へてゐる。

エニツド

あなたを倒してしまひますよ。

アンソニー

(靜かに。)エニツドや、わしは決して尻込みはしない、その點は安心するがいい。

(テンチ書類を持つて再び這入つて来る。二人を眺めてから勇氣を出して。)

テンチ

御免下さい、奥さん、お晝ををいただきます前にこの書類を片付けて置き度いと存じますので。

(エニツドぢれつたさうに彼を見てから、更に父親を眺め、不意に身を返して客間へ出て行く。)

テンチ

(書類とペンをアンソニーに差し出しながら、非常 神経質に。) 恐れ入りますが、これに御署名を願ひ度う御座いますか？

(アンソニー、ペンを取つて吐息す。)

テンチ

(エドガアの椅子の後方で吸取紙を持つて立つたまま、もぢもぢしながら話しかける。) 私はあなたに今の地位を與へていただいたので御座いますね、社長。

アンソニー

で？

テンチ

私は有らゆる出来事を見てゐなくてはならないので御座います、社長。私は——私は全く會社を力にいたしてゐるので御座います。で、若し會社に何か起るやうなことがありますと、私に取つては大變で御座います。(アンソニーうなづく。) それに家内は又子供を産みましたので、昨今はモウ一層心配いたしてゐるので御座います。それに配當が實にひどう御座いますので。

アンソニー

(冷淡な興味をもつて。) わしが蒙むつてゐるほどひどくはあるまい。

テンチ

いや、社長？(非常に神経質に。) 私は會社があなたに取つてどんなに大切だか存じてをります、

社長。

アンソニー

さうだ、わしが設立したのだからな。

テンチ

さうです、社長。若しストライキが續くとしますと形勢は頗る重大だと思ひます。重役方はそれを認められたやうに思はれます。

アンソニー

(皮肉に。) どうだか？

テンチ

私は、あなたが非常に強硬な御意見を持つていらつしやるのを存じてをります。それにあなたは、何時でも事件をはつきりと御覽になるのですから、が、どうも重役方はそれを——好まないやうで

す、で今重役方は——それを知つてゐられるのです。

アンソニー

(冷淡に。) 君もさうらしいな。

テンチ

(あるかなさかの微笑をもつて。) いいや、社長。勿論私には子供が御座います、家内は病身です、私の位置としてはこれらのことを考へて見なくてはなりません。(アンソニーうなづく。) 私が申上げやうと思ひましたのは其事ではないので御座います、失禮ながら(逡巡する。)

アンソニー

云つてしまひなさい!

テンチ

私の父がさうで御座いましたが、誰でも年を取りますと、物事を大變——

アンソニー

(殆んど親らしく。) いいから云ひなさいテンチ!

テンチ

どうも申し度くありません。

アンソニー

(冷酷に。) 云はなくてはいかん。

テンチ

(間を置いて、絶望的に言葉を絞り出す。) 重役方は、あなたを排斥しやうとしてゐるやうです。

アンソニー

(黙つて着席してゐる。) ベルを鳴らしてくれ!

(テンチびくびくしながらベルを鳴らす、そして火の傍に立つてゐる。)

テンチ

こんなことを申上げまして、相済みません。私は唯あなたのことばかり考へてゐたので御座います。

(フロスト廊下から這入て来て卓の下手に来る、そしてアンソニーの顔を見る。テンチは書類を片付けるやうな風をして自分の興奮を誤魔化す。)

アンソニー

ウキスキイ・ソオダを持つて来い。

フロスト

何か召上りますか？

(アンソニー頭をふる——フロスト棚の處へ行つて飲みものを仕度する。)

テンチ

(低い聲で、殆んど歎願的に。) 若しあなたの御意見通りになりましたら、私はどんなに安心いたしますでせう、全くで御座います。(彼はアンソニーの顔を見る。アンソニーにちつとしてゐる。) 私はもろ心配でたまらないので御座います。私はこの幾週間といふもの碌に寝ないので御座います、全くなので御座います。

(アンソニー彼の顔を眺めて、靜かに頭をふる。)

テンチ

(がっかりして。) いや、社長？(彼は猶も書類を片付ける。フロスト、ウキスキイ・ソオダを盆に乗せてアンソニーの右手の處に置く。彼は離れて立ちながら、眞面目腐つてアンソニーを見てゐる。)

フロスト

何か御用は御座いませんか、社長？

(アンソニー頭をふる。)

あなた様は、先生のおつしやいましたことをお忘れでは御座いますまいな。

(間。フロスト不意に彼に近寄り低い聲で話す。)

フロスト

このストライキが、社長、あなた様のお氣勞れの原因で御座います。甚だ何んで御座いますが、それは——それだけ價值が御座いますでせうか？

(アンソニー何事かを口の中で呟く。)

は、承知いたしました、社長！

(彼は身を返して廊下へ出て行く——テンチは二度話しかけるが、社長は眼を合はして彼の眼を落とし、佯しげに身を返して出て行く。アンソニー一人残され。彼はコップを掴みグツと呑み干す、そして深い喉から出る吐息と共にコップを下に置き、ぐつたりと椅子に身を反らす。)

幕が下りる。

第二幕

第一場

三時半である。ロバアツの小家の臺所には貧しい小さな火が燃えてゐる。部屋は清潔でちやんとしてゐる、家具は至つて少なく、煉瓦の床と白く洗はれた壁がある、それらは煙でくすぶつてゐる。火の上には藥罐が掛けてある。火の反對の側に有る扉は雪の降つてゐる往來から内側へ開くやうになつてゐる。木のテーブルの上には、コップ、壺皿、急須、ナイフ、パンとチーズの皿などがある。火の側の古い脇掛椅子にミセス・ロバアツが毛布にくるまつてゐる、瘦せこけた髪の毛の黒い三五六の婦人で病人らしい眼付きをしてゐる。彼女の髪は取上げて無く、リボンで結んで後ろに垂らしてある。同じく火の側にミセス・ヨオがある、髪の毛の赤い幅広い顔の女である。テエアルの近くにミセス・ラウスが腰をかけてゐる、灰H色の顔をした、銀髪の老嫗である。扉の處には出て行かうとする様でミセス・バルギンが立つてゐる、小さな色の若い貧苦にやつれ果れた女である。又テエアルに兩腕をつき、頬杖をしてマツヂ・トマスが椅子に腰を下してゐる、二十二になる器量のいい娘で、頬骨は高く、眼は凹み、黒い亂れた髪の毛をしてゐる。彼女は話

を聞いてゐるが、口も利かれば身動きもしない。

ミセス・ヨオ

で、あの人はわたしに六ペンスくれたのだよ、この週になつてお金らしいもの見たのはそれが初めてさ。この火は一向暖かくないね。ラウスのお婆さん、此處へ来ておあたりよ、お前さんまるで雪みたいにな真白な顔をしてゐるぢやないの。

ミセス・ラウス

(慄えながら——穩かに。) ああ！然し内の爺さんの亡くなつた年の冬はもつと寒い冬だつた、七十九年のことだからの、お前さん達は太抵生れない前だつた——マツヂ・トマスやスウ・バルギンは。(彼女等を順に見ながら。) アンニイ・ロバアツあんたは幾つだつたかな？

ミセス・ロバアツ

七つでしたわ、ラウスのお婆さん。

ミセス・ラウス

七つ——ほほう！ほんの子供だつたの。

ミセス・ヨオ

(突つかかるやうな調子で。)でも、わたしは十でしたよ、わたしそれを覚えてるますよ。

ミセス・ラウス

(穩かに。) 會社が出来てから三年になるかならなかつたからのう。爺さんは酸の工場で働いてゐたのだよ、そいで毒足になつたのだよ。わしはしよつちう爺さんに、『とつあんや、お前さん毒足になつたのう』と云つてゐた。すると爺さんは、『毒だか毒でねえか知らねえが、おいらもう歩けねえ。』と云つたのだよ。それから二日目に仰向けに寝たつきり、もう二度とは起きなかつたのだよ。それも神様の思召だつたのさ！その當時にやあ、今のやうな賠償規定なんてものは無かつたでのう。

ミセス・ヨオ

その冬にはストライキは無かつた！(悲痛なユウモアをもつて。)わたしにはこの冬がやり切れないのさ。ロバアツのおかみさん、お前さんだつてこれよりも甚い冬に會ひたくはないやね？お飯を喰べるのが變に思はれはしないかね、バルギンのおかみさん？

ミセス・バルギン

わたしの内ではこの四日ばかりパンとお茶があつたのさ。

ミセス・ヨオ

お前さんこないだの金曜日の洗濯の仕事に有り付いたのかね？

ミセス・バルギン

(がっかりして。)わたしにさせると云つたのだがね、こないだの金曜日に行つたらもう満員さ。で又來週行かなくてはならないのだよ。

ミセス・ヨオ

まあ！仕事をしたいものが多すぎるからね。わたしは氷の上で旦那衆がスケートの稽古をしてゐる處へヨオをやつたのだよ、そして幾らでも儲けてお出でつてね。家の中で考へ込んでゐるよりはましだからね。

ミセス・バルギン

(能しい、あたりまへらしい口調で。)男はまあいいとしても——子供達は全く可哀相だよ。わたしは寝かして置くのだが、走り廻らないでゐると幾らかひもじさが違ふやうだよ。でも床の中にちつとしてゐるたがらないので、もう困り抜いてゐるのだよ。

ミセス・ヨオ

でもお前さんは未だ仕合せさ、子供が皆んな小さいから。學校へ行くのだと、そりやお中がへる

からね。バルギンさんは何んにもくれないのかね？

ミセス・バルギン

(頭をふる、それから思ひ返へしたらしく。)有りさへすりやあくれるのだらうけどもね。

ミセス・ヨオ

(苦々しげに。)へえ！あの人は會社から配當は貰はないのかね？

ミセス・ラウス

(臆病な快活さをもつて立上りながら。)

では左様なら、アンニイ・ロバアツ、わしは内へ歸るからう。

ミセス・ロバアツ

まあいいでせう、お茶を一杯呑んでいらつしやいな、ラウスのお婆さん？

ミセス・ラウス

(幽かな微笑をもつて。)ロバアツさんが歸つて來たらお茶が入るだらうからう。わしは歸つて寢ることにしませう、何處にゐるよりもその方がぬくいからう。

(よろよろ、よろめきながら扉の方へ行く。)

ミセス・ヨオ

(立上つて腕を貸しながら。)さあ、お婆さん、わたしの腕におつかまり、わたし達同じ道だからね。

ミセス・ラウス

(腕につかまりながら。)有難うよ！

(彼女等出て行く、ミセスバルギンこれに従ふ。)

マツヂ

(初めて身動きをしながら。)どう、アンニイさん、分つたでせう！あたしジョオジ・ラウスにさう云つたのよ、『この事件がおしまひにならない内は、あたしと付き合はうとしたつて駄目ですよ。恥とは思はないの、』あたし云つてやつたの、『自分のお母さんが幽霊みたいな恰好をして、火を焚かうにも薪一本無いぢやないか。自分達が煙草の飲める間は、あたし達を餓死さすのだね。』と。するとね、『俺は誓言するよ、マツヂ、』とあの人は云ふの、『俺はこの三週間といふもの煙草も酒も飲まないのだ！、』さう、ぢやあなせ何時までもストライキをやつてるの？、『ロバアツの手前今更引く譯には行かない！』……それだ！ロバアツ、何時もロバアツ！ロバアツさへるなけりや皆んな止めたいのだから。あの人が演説すると皆んな頭が狂つてしまふのだわ。

(沈黙。ミセス・ロバアツ若しげに身體を動かす。)

ああ！あんたはあの人を負かし度くはないでせうね！御亭主なのだから。誰も彼もが影法師みた
いになつてゐても！(ミセス・ロバアツに對して仕草をする。若しラウスがあたしと一緒にいたいな
ら、ロバアツを見捨てなくてはならないわ。若しあの人かロバアツを見捨てたら——皆んなも見捨
るに違ひない。皆んなは唯誰かが切り出すのを待つてゐるのだから。内のお父さんはあの人に反對な
のよ——皆んな心の内ではあの人に反對なのよ。)

ミセス・ロバアツ

ロバアツを負かすことは出来ませんよ！(黙つて互ひに顔を見合はす。)

マツヂ

どうですか？卑怯者——自分達の母親や子供が途方に暮れてゐるのに。

ミセス・ロバアツ

マツヂ！

マツヂ

(探ぐるやうにミセス・ロバアツを眺めながら。)あの人にはあんたの顔を見ることが出来るかしら。(火の

前にしやがんで火に手をかざしながら。)ハアネスさんが又來てゐるのよ。皆んなは今日中に何んとか
決心しなくてはならないのよ。

ミセス・ロバアツ

(柔かなゆつくりした、西國訛りのある口調で。)ロバアツは決して火夫や技手を見棄てはしないのよ。
それは正しくありませんからね。

マツヂ

あたしをだまさうたつて駄目よ。それはあの自尊心なのよ。

(扉を叩く音が聞える。彼女達がふり向き同時にエニツドが這入つて來る。彼女は丸い毛皮の帽子をかぶり
栗鼠の毛皮のジャケットを着てゐる。彼女は這入つた後の扉を閉める。)

エニツド

這入つてもよくつて、アンニイ？

ミセス・ロバアツ

(もじもじしながら。)まあお嬢様！アンダアウツドの奥様に椅子をお上げしておくれな、マツヂ！
(マツヂ自分の腰掛けてゐた椅子をエニツドに譲る。)

エニツド

有難う！（ミセス・ロバアツに。）少しはいいかえ？

ミセス・ロバアツ

ええ、奥様。有難う御座います。

エニツド

（不機嫌らしいマツヂを眺めながら、座をばづして貰ひたさうに。）なぜゼリイを戻したりなんぞするのよ？それは本當に意地悪ると云ふものだけわ。

ミセス・ロバアツ

有難う御座いました、奥様、でも入りませんものですから。

エニツド

おや、おや！ロバアツがさうさせたのでせう？あの人はよくまあお前さん達に難儀をさせて置けるわね？

マツヂ

（不意に。）難儀つて何んです？

エニツド

（吃驚して。）おや、御免なさい！

マツヂ

難儀してゐるなんて誰がさう云ひました？

ミセス・ロバアツ

マツヂ！

マツヂ

（頭からシカクを掛けながら。）あたし達のことはあたし達にさせていただきたいものですね。此處へ探偵なぞしに来て貰ひたくありません。

エニツド

（彼女の方へ向き直りながら、席は立たないで。）お前さんに云つたのではありませんよ。

マツヂ

（低い、烈しい聲で。）なまじつかな御親切なんか起さないやうになさいまし。あなたはあたし達の中へ來られると思つていらつしやいますが、それは間違ひですよ。歸つて支配人にさうおつしや

いまし。

エニツド

(冷刻に。)「ここはお前さんの内ではありませんよ。」

マツヂ

(扉の方へ向きながら。)「いいえ、あたしの内ではありません。あたしの内なぞへは寄り付かないやうにして貰ひませう、アンダアウツドの奥さん。」

(彼女出て行く。エニツド、テエアの上を指てコツコツ叩く。)

ミセス・ロバアツ

マツヂ・トマスをお悪くお思ひになりませんやうに。奥様。あの子は今日少しのほせてゐるので御座いますから。(間。)

エニツド

(彼女を見ながら。)「まあ、皆んな譯の分らない連中ばかりなのね。」

ミセス・ロバアツ

(幽かな微笑をもつて。)「ええ、奥様。」

エニツド

ロバアツは出かけたのかえ?

ミセス・ロバアツ

はい、奥様。

エニツド

あの人のせるなのだよ、皆んなが相談に乗らないのは。ね、さうだらう、アンニイ?

ミセス・ロバアツ

(和らかに、その眼をエニツドに注ぎながら、そして絶えず片手の指で胸の上をなでながら。)「お父様がおききにならないのだと申してをりますが、奥様——」

エニツド

お父さんはもう年がよつてゐるのだからね、年寄りといふものは皆んなあんなのよ。

ミセス・ロバアツ

お氣の毒ですわ、奥様。

エニツド

(二層和らかに。)お前が氣の毒にお思ひだらうとは思はなかつたわ、アンニイ。あたし、それはロバアツとお父さんのせるだといふことを知つてるのよ。

ミセス・ロバアツ

誰も年寄りになるのはお氣の毒に思ひますわ、奥様。年寄りになるのはこわう御座います、アンニイ様は本當にいいお年寄りだとしよつちうさう思つてゐましたの。

エニツド

(衝動的に。)お父さんは何時もお前がお好きだつたのだよ、覚えてゐるでせう？ さあ、アンニイ、何をして上げやう？ 是非それが云つてほしいの。お前無くてならないものがまるで無いぢやないの。(火の側へ近付き、薬罐を下し、石炭を探がす。) お前本當に意地悪るですよ、スープや外のものを戻して寄越すなんて！

ミセス・ロバアツ

(幽かな微笑をもつて。)ええ、奥様？

エニツド

(腹立しげに。)まあ、石炭も無いのね？

ミセス・ロバアツ

お願いですから、奥様、薬罐を掛けて置いて下さいまし。ロバアツが戻りましたら直ぐお茶を呑むでせうから。四時には皆んなと會合する筈ですから。

エニツド

(薬罐を火にかけながら。)皆んなを亦焚き付けやうと云うのね。行かせないやうには出来ないかえアンニイ？ (ミセス・ロバアツ皮肉らしく微笑す。) やつて見たことがあつて？ (沈黙。) あの人はお前がどんなに悪いか知つてて？

ミセス・ロバアツ

少し心臓が弱いだけですわ、奥様。

エニツド

内にゐた時分には本當に丈夫だつたのにねえ。

ミセス・ロバアツ

(固くなりながら。) ロバアツは何日も私に善くしてくれます。

エニツド

でも入るだけのものは皆んな無くしてはならないのに、何んにも無いぢやないの！

ミセス・ロバアツ

(訴へるやうに。)私、死にさうな病人とは見えないつて云はれますけど！

エニツド

見えないともね、唯あの、何さへすればね——お医者様を寄越すが見て貰うかえ？屹度よくして下さると思ふがね。

ミセス・ロバアツ

(微かな疑問をもつて。)ええ、奥様。

エニツド

マツチ・トマスは此處へ来てはいけないね、あの子はお前さんを興奮させるばかりだからね。職工達がどんなに難儀してゐるか、それをあたしが知らないでゐると思つてゐるのだよ！あたしは本當に職工達に同情してゐるのよ、でも少しやり方が極端すぎるからね。

ミセス・ロバアツ

(紐はず指を動かしながら。)でも賃銀をよくしていただくには、それより外に方法がないのだと云

ふぢやありませんか、奥様。

エニツド

(熱心に。)だつて、アンニイ、それだから組合があの人達を助けないのぢやないの。内の人は大變職工に同情してゐるのだけでも、賃銀が安すぎはしないと云つてゐるのよ。

ミセス・ロバアツ

いいえ、奥様？

エニツド

あの人達は、あの人達の要求してゐる賃銀を拂つたら、会社がどうしてやつて行けるか、それを考へないのぢや。

ミセス・ロバアツ

(思ひ切つて。)でも配當は随分多かつたぢやありませんか、奥様。

エニツド

(面喰つて。)お前さん達は皆んな、株主は金持だと思つてゐるのね、でもさうぢやないことよ——大抵の株主は職工以上の生活をしてはゐないのよ。(ミセス・ロバアツ微笑する。)何しろ體裁を繕はな

くてはならないからね。

ミセス・ロバアツ

ええ、奥様？

エニツド

お前さん達はあの人達のやうに、地方税だの國税だの、その外いろんなものをかさねていいのだからね。若し職工達が無暗に酒や賭博にお金を浪費しないなら、樂に生活が出来るのだよ！

ミセス・ロバアツ

でも随分烈しく働くのだから、何か樂みがなくてはと、さう申してゐますわ。

エニツド

でも、そんな下等な樂みは駄目よ。

ミセス・ロバアツ

(少し腹立しげに。) ロバアツはお酒なんか一滴も呑んだことはありませんわ、そして一度だつて勝負ごとに手を出したことはありませんわ。

エニツド

ええ！でもあの人は並の——いえ、あの人は技術家ですからね——えらい人ですからね。

ミセス・ロバアツ

ええ、奥様。ロバアツは、職工達は外の樂みをするだけの餘裕がないと申してゐますわ。

エニツド

(思案しながら。) さうね、そりやお随分むづかしからうとは思ふわ。

ミセス・ロバアツ

(意地悪く。) それに立派な紳士方だつて同じやうによくないと云ふことですわ。

エニツド

(微笑しながら。) あたしは萬事世間並みにしてゐるけどもね、アンニイ、そんなことは嘘だと云ふことは知つてゐるだらう？

ミセス・ロバアツ

(痛ましい努力をもつて。) 職工達の中には決して居酒屋なんかへ足ぶみしない人が澤山ありますわ。それでも一向お金がたまりませんの、そして病氣にでもなると直ぐ無くなつてしまひますの。

エニツド

でも共済會が有るぢやないの？

ミセス・ロバアツ

共済會は一週に十八シリングしかくれませんが、奥様、一軒の内にそればかりでは何んにもなりませんわ。ロバアツは、職工は何時も其日暮らしたと云つてゐます。明日の一シルよりは今日の半シルだと、斯う申してゐるので御座います。

エニツド

でも、それが賭博心なのよ。

ミセス・ロバアツ

(興奮の體で。) ロバアツは、労働者の一生は生れ落ちた時から死ぬる時まで、全く賭博だと申し
てゐますわ。

(エニツド前に乗り出す、興味を感じて。ミセス・ロバアツは益々奮興しつつ語りつづける、それは最後の言葉の個人的感情において絶頂に達する。)

あの人は斯う云つてゐますわ、奥様、労働者の赤ん坊が生れると、それは呼吸をしつづけるかどうかといふ一呼吸の賭けだ、そして一生さうなのだ。で年を取ると救貧院か墓地かだ。あの人は又、

吾々は出来るだけケチにして、自分達も子供も食ふものも食はないやうにして儉約しないでは、餘裕も財産も出来ないと言ひますの。あの人が子供をほしがらないのは、それが爲なのですわ(後へ身をそらす)幾ら私がほしがつても。

エニツド

ええ、ええ、分つててよ！

ミセス・ロバアツ

いいえ、お分りにはなりません、奥様。奥様はお子さん方がお有りですもの、そして別にそれで苦勞をなさらないでもいいのですから。

エニツド

(釋かに。) そんなにたんとお話をしてはいけなくつてよ、アンニイ。(不圖我れ知らず。) でもロバアツはどつさりお金を貰つてゐたぢやないの、例の製法を發見したので？

ミセス・ロバアツ

(辯護の態度で。) ロバアツの貯金は皆んな無くなりましたわ。あの人はずつと前からこのストライキのことを考へてゐたのですわ。あの人は、外の人達が難儀をしてゐるのに、一文だつて持つてゐる

権利は無いと云ひますの、皆んなが皆んなさうではありませんのよ！中には他人のことなんかまるで考へない人もありますの——自分達さへ食べて行ければ。

エニツド

こんなに困つてゐながら、一體どうしやうと思つてゐるのだらうね。(調子も變へて)然しロバアツはお前のことを考へなくてはなりませんよ！本當に恐ろしいこと！お湯が沸いたよ。お茶を入れやうかえ？(急須を取り、茶が這入つてゐるのを見て、湯をつぐ)一杯呑まないこと？

ミセス・ロバアツ

いいえ、有難う御座います、奥様。(彼女は耳を傾ける、足音を聞かうとするかのやうに)私、ロバアツにお會ひにならない方がいいと思ひますの、奥様、あの人直ぐムキになりますから。

エニツド

まあ！でも會はなくてはならないのよ、アンニイ。あたし本當に落付いてゐるから、屹度。

ミセス・ロバアツ

あの人に取つては生きるか死ぬるかてんですからね。奥様。

エニツド

(非常に穩かに)あたし外へ出て貰つて話すわ、お前を興奮させはしないことよ。

ミセス・ロバアツ

(幽かに)いいえ、奥様。

(彼女は不意に烈しく立上る。ロバアツが何時の間にか這入て來たのである。)

ロバアツ

(帽子を取りながら——ちよつとさなぶり氣味に)御免なさい這入つて來て、貴婦人とお話をしてゐるやうだね。

エニツド

あたし少しお話したいことがあるの、ロバアツさん？

ロバアツ

さうおつしやいますのはどなた様の奥様でいらつしやいましたかしら？

エニツド

何んですね、知つてゐるくせに！あたしはアンダアウトドの家内ですよ。

ロバアツ

(悪意ある辭儀をもつて。) 社長の令嬢ですね。

エニツド

(熱心に。) あたしはお前さんに話さうと思つて出かけて來たのですよ、ちよつと外へ出てくれませんか？

(彼女はミセス・ロバアツの方を見る。)

ロバアツ

(帽子をかけながら。) 何も申上げることはありませんな、奥様。

エニツド

でもあたしは話さなくてはならないのです。

(彼女扉の方へ行く。)

ロバアツ

(不意に悪意をもつて。) 聞いてる暇がありません！

ミセス・ロバアツ

ダヴィツド！

エニツド

ロバアツさん、願ひだから！

ロバアツ

(外套をぬぎながら。) 貴婦人の仰せに背いて誠に相済みませんが——アンソニー氏のお嬢さん。

エニツド

(逡巡しながら、不意に決意して。) ロバアツさん、又職工の會合が有るといふことですね。

(ロバアツ辭儀をする。)

あたしあなたに願ひに出たのです。どうぞ、どうぞ何とか妥協するやうにして下さい。少し譲歩して下さい、あなた達の爲にでも！

ロバアツ

(獨り言を云ふ。) アンソニー氏の令嬢が、吾々自身の爲にでも少し譲歩してくれと俺にお頼みになるぞ。

エニツド

皆んなの爲に、あなたの妻の爲に。

ロバアツ

俺の女房の爲に、皆んなの爲に——アンソニー氏の爲にか。

エニツド

なぜあなたは父に對してそんなに手きびしいのです？父はあなたに對して何んにもしたことはないではありませんか。

ロバアツ

さうでせうか？

エニツド

父の意見は仕様がありませんわ、あなたの意見だつてさうですからね。

ロバアツ

わたしはわたしに意見なんか持つ権利が有るかどうかわからないのです！

エニツド

父は年寄りですからね、そしてあなたは——

(彼がちつと見詰めてゐるのを見、言葉を切る。)

ロバアツ

(聲を高くしないで。)若しわたしが、アンソニー氏が死にかかつてゐるのを見て、わたしが手を舉げたら助けることが出来るとしても、わたしは指一本舉げることぢやない。

エニツド

あなたは——あなたは——

(彼女は唇をかみながら言葉を切る。)

ロバアツ

いやしない、斷じて！

エニツド

(冷やかに。)それは口先きだけです、自分だつて知つてゐるくせに！

ロバアツ

わたしは飽くまでもさう思つてゐるのです。

エニツド

なぜです？

ロバアツ

(きつこなつて。)アンソニー氏は壓制の代表者です！それが理由です！

エニツド

飛んでもない！

(ミセス・ロバアツ立ち上らうとするやうな動作をする、が再び椅子にぐつたりとなる。)

エニツド

(烈しい仕事と共に。)アンニー！

ロバアツ

どうかわたもの女房にさわらないやうに願ひます！

エニツド

(ぞつとしたやうに身を引きながら。)あ、さうだ——あなたは氣が違つたのね。

ロバアツ

氣違ひの内は貴婦人方のいらつしやるべき處ではありません。

エニツド

あたし、あなたを恐れはしない。

ロバアツ

(辭儀をしながら。)アンソニー氏の令嬢が恐れたりなさうとは思ひません。アンソニー氏は外の連中のやうに卑怯者ではありませんからね。

エニツド

(不意に。)ぢやあ勇ましいことだと思つてゐるのね、この争ひを續けて行くのが。

ロバアツ

アンソニー氏は女や子供と戦ふのを勇ましいことだと思つてをられますか？アンソニー氏は確かな金持だと思ふが、一文も持たない者を相手に戦ふのを勇ましいことだと思つてをられますか？子供を飢ゑに泣かし、女を寒さに慄へさすのを勇ましいことだと思つてをられますか？

エニツド

(打撃を防ぐかのやうに、手を舉げて。)

父は主義によつて行動してゐるのです、あなたは知つてゐる筈です！

ロバアツ

わたしもさうです！

エニツド

あなたは、あたし達を信んでゐる、そしてどうしても負けたくないのです。

ロバアツ

アンソニー氏もさうなのです、どんなことを云はれやうとも。

エニツド

何んにしても自分のおかみさんだけは同情しておやりなさい。

(ミセス・ロバアツは、手で心臓の上を押へてゐるが、それをやめて、呼吸を締めやうと努める。)

ロバアツ

奥さん、もう申上げることはありません。

(彼はパンを手に取る。扉を叩く音がして、アンダアウツドが這入つて来る。彼は立つたまま彼等を見てゐる。)

エニツドは彼の方へ向いて、もじもじしてゐる。

アンダアウツド

エニツド！

ロバアツ

(皮肉に。)奥さんのお迎へには及びませんでしたぜ、アンダアウツドさん。吾々はあはれ者では
ありませんからね。

アンダアウツド

分つてるよ、ロバアツ。細君は少しはいいかね。

(ロバアツ返事をせずに楯を向く。)

行かう、エニツド！

エニツド

もう一度お願いするわ、ロバアツさん、あなたの妻の爲に。

ロバアツ

(叮嚀な悪意をもつて。)失禮ながら御忠告しますがね、奥さん——あなたの夫と父の爲にとおつし
やつた方がよろしいでせう。

(エニツドやり返したいのを堪へて出て行く。アンダアウツドは彼女の爲に扉を開けてやつて其後か
出
て行く。ロバアツ火の處へ行つて、消えかつつてゐる火に手をかざす。)

ロバアツ

どうだな、少しはいいかい？

(ミセス・ロバアツ幽かに微笑す。彼は自分の外套を持って来て彼女にかけてやる。)

(時計を見ながら。) 十分で四時か！(感激したらしく。) 俺は奴等の顔を見たのだ、戦ふ氣色はない、あの爺の泥棒以外には。

ミセス・ロバアツ

少しゆつくりして、何か上つたらどう、ダヴィッド？あなた今日朝から何んにも喰べないぢやないの！

ロバアツ

(喉に手をやりながら。) あの年取つた詐欺師共が町にゐる間は、何んにも喉へは通らない。(あちらこちらと歩く。) 職工共は愚圖愚圖云ふに違ひない——奴等は意志が薄弱だからな、卑怯者め。蝙蝠みたいに目が見えないのだ——鼻の先きの一日が見えないのだ。

ミセス・ロバアツ

女なのよ、ダヴィッド。

ロバアツ

ああ！そんなことを云うんだ！自分達の腹が物を云うやうになると女のことを思ひ出すのだ！女共は奴等が酒を呑むのを留めないで、神聖な主義の爲に少しばかり自分達が困ると、慌ててそれを留めるのだ。

ミセス・ロバアツ

でも子供のことも思つてやらなくては、ダヴィッド。

ロバアツ

ああ！若し奴等が、奴等が生み付けてゐる子供の將來のことを少しも考へないで、奴隷をこしらへてゐると——

ミセス・ロバアツ

(喘ぎながら。) もう澤山、ダヴィッド、そのことを云ひ出してはいけない——わたし、もう——わたし、もう——

ロバアツ

(彼女を見詰めながら。) これ、これ！

ミセス・ロバアツ

(呼吸を切らして。) いえ、いえ、ダヴィッド——わたし堪らない!

ロバアツ

よし、よし! いいよ、いいよ! 分つたよ。(苦々しげに。) 奴等はいふ時の爲に一文だつて取つて置かないのだ。全くよ! その日暮しだ——畜生!——何んて奴等だ! やり出す時にやあ留めても止まらなかつたくせに、今ちやあ小さくなつてゐるやがる。

ミセス・ロバアツ

どうしてそれがあてになるものですか、ダヴィッド? あの人達だつて鐵で出来てはゐらないのですもの。

ロバアツ

それがあてにならない? 俺は俺のしやうとすることをあてにするぢやないか? 俺は負ける位なら餓死して腐つた方がましだと思つてゐるぢやないか? 一人の人間に出来ることは外の者にも出来る筈だ。

ミセス・ロバアツ

で女は?

ロバアツ

これは女の仕事ぢやない。

ミセス・ロバアツ

(悪意の閃きをもつて。) いいえ、女は男の苦勞の爲に死ぬかも知れない。それは女の仕事です。

ロバアツ

(彼の眼をそらしながら。) 誰が死ぬるなんて云つた? 誰も死になんぞしはしない、吾々が奴等を負かすまでは——

(彼は再び彼女の眼に出會ひ、亦もや眼をそらす。興奮の體で。)

俺はこの數個月間こればかり待ち受けてゐたのだ。年取つた泥棒共をやつ付けてこれつばかりの變更もなしに奴等を追ひ返へしてやらうと思つてゐたのだ。俺はちやんと奴等の面を見たのだ、敗北の影の谷でだ。

(木釘の處へ行つて帽子を取り下す。)

ミセス・ロバアツ

(彼女の眼でそれを追ひながら——和らかに。) 外套を着ていらつしやいよ、ダヴィッド、随分寒いに

違ひない。

ロバアツ

(彼女に近づいて——彼の眼は横へそれがうである。) いや、いや！いいからちとして暖かにしておいで。俺は直ぐ歸つて来るから。

ミセス・ロバアツ

(和らかな悲痛をもつて。) 着て行つた方がいいことよ。

(彼女は外套を持ち上げる。がロバアツはそれを元のやうにかけて、彼女を包んでやる。彼は彼女と眼を合はさうとするが出来ない、ミセス・ロバアツは外套にくるまつて、ちつきしてゐる。彼を追ふ彼女の眼は半ば怨めしきうに半ば愛しさうである。彼は再び時計を見て、出て行かうとする。扉口でヤン・トマスに出會ふ、十歳の子供でダブダブした着物を着て一文呼子笛を持つてゐる。)

ロバアツ

来たな、坊主！

(彼は出て行く、ヤンはミセス・ロバアツから一碼ばかり離れた處に立つて、何んにも云はずに彼女を見詰めてゐる。)

ミセス・ロバアツ

何、ヤン！

ヤン

おとうちやんが来るよ、マツヂ姉ちゃんも来るよ。

(彼は卓に向つて腰をかけ、呼子笛でこつこつ叩く。三度出鱈目に吹いて見してから、郭公の啼き聲を真似る。)

こつこつ扉を叩く音がする。老トマスが這入つて来る。)

トマス

えいお天気だの、おかみさん。少しはえいだかな。

ミセス・ロバアツ

有難う、トマスさん。

トマス

(神経質に。) ロバアツは内かな？

ミセス・ロバアツ

今集會へ出かけて行きましたの、トマスさん。

トマス

(ほつきして、饒舌になる。) それはふんとにまんが悪いこつだ！わしは、わし達はロンドンと折れ合はなくちやあならねえと云ひに來たのだ。もう集會へ出かけたといふのは、ふんとに氣の毒なこつだ。ロバアツは屹度役にも立たねえ反對をしてゐるにちげえねえて。

ミセス・ロバアツ

(半ば立ち上りながら。) あの人は決して降參なんかしやしませんわ、トマスさん。

トマス

さうぢれてはよくねえだ、それはふんとによくねえだ。でいいかな、今ではもうあの男の肩を持つものはねえのよ、技手達とジョオジ・ラウスの外には。(嚴肅に。) このストライキはモウ教會と一致せんぢや、いいかな！わしはよく氣を付けて聞いてゐた。そして相談もして見たのだ。(ヤン呼子笛を吹く。) しつ！わしは外のものの云ふことなどは氣には留めん、わしは教會がこのいざこざをやめろと云つてゐると思ふぢや。そして又わしの考では、わし達皆なにも、これに越したことはなと思ふのぢや。わしの考でないなら云ひはせんが——わしの考ぢやでな、いいかな。

ミセス・ロバアツ

(興奮を押へながら。) わたしロバアツはどうなるだらうと思ひますわ、あなた方が降參なすつたら。

トマス

それは決して恥ではねえだよ！人間として出来るだけのことはやつたのだからな。あの男は人間の自然に逆らつてやつたのだ、當り前のこつた——誰でもさうなるだ。が教會が云うんだからな、それに反對してはならねえだ。

(ヤン郭公の啼き聲を真似る。)

びいびいやるぢやねえぞ！(扉の方へ行きながら。) 娘が看病に來たからな。左様なら、おかみさん——ぢれてはいかんぞ——いいかな！

(マツヤ這入つて來て開いてゐる扉口に立つて往來を見守る。)

マツヂ

おそくなりませよ、お父さん、もう初めてゐますよ。(彼の脇を捕へて。) ごしようだから、あの人の反對して頂戴、お父さん——こんどこそ！

トマス

(嚴かに脇を放しながら。) わしがいいやうにするから安心してをれ！

(彼は出て行く、マツヂ 開いて扉口の真中から靜かに内へ這入る、誰かが近付いて來たのを避けるかのやうに。)

ラウス

(扉口に近付きながら。) マツヂ!

(マツヂ、ミセス・ロバアツに背を向けて立ち、頭をそらし手を後ろにやつて彼を見詰める。)

ラウス

(彼は烈しい取亂した顔付をしてゐる。) マツヂ! 俺はこれから集會へ行くのだ。

(マツヂ、身體を動かさずに、さげすむやうに微笑する。)

分らないのかい?

(彼等は口早やな低い聲で話す。)

マツヂ

分つてゐるわ! いらつしやい、そして自分の母親を殺すがいい、さうしなくてはならないのなら。

(ラウス彼女の兩腕をつかむ。彼女はきつこなつて立つてゐる、頭をそらして。彼は彼女を放して同じやうにぢつと立つてゐる。)

ラウス

俺はロバアツの味方をすると言つたのだ。俺は誓つたのだ! お前は俺の誓つた言葉を反古にさせやうとするのだ。

マツヂ

(ゆるやかな和らかな嘲笑をもつて。) あなたは立派な戀人ね!

ラウス

マツヂ!

マツヂ

(微笑しながら。) 戀人といふものは、その思つてゐる女の云ふ通りにするものだといふことだわ——
(ヤン郭公の啼き聲をさせる。) ——でも、それは本當ではないらしいのね!

ラウス

俺を罷工破りにしやうてのか!

マツヂ

(眼を半ば閉ぢて。) あたしの爲にして頂戴!

ラウス

(頬を手で頬に撫でながら。) えい！俺には出来ない！

マツヂ

(早口に。) あたしの爲にして頂戴！

ラウス

(切齒しながら。) 難題をふっかけ無いやうにしてくれ！

マツヂ

(頭をヤンの方へ向けながら——早口に且つ低く。) あたしなら子供にパンをやりたいからするわ！

ラウス

(烈しい強きで。) マツヂ！おお、マツヂ！

マツヂ

(和らかな微笑をもつて。) あたしとの約束を破ることは出来ませんよ！

ラウス

(つまるやうな聲で。) ぶやあ畜生、やる！

(彼は身を返へして馳せ去る。)

(マツヂは幽かな微笑を浮かべながら彼の後を見送る。そしてテエアルの處へやつて来る。)

マツヂ

あたしロバアツをやつ付けてしまつたわ！

(ミセス・ロバアツがぐつたり椅子にもたれてゐるのを見る。)

マツヂ

(駆け寄つて彼女の手に触りながら。) 石みたいに冷たいのね！ブランデエを少し飲まなくては。ヤン

『ライオン』へ走つて行つて、ロバアツの叔母さんのお使ひ。だとお云ひ。

ミセス・ロバアツ

(弱々しく身を動かして。) 少しの間ぢつとしてゐるわ、マツヂ。ヤンに——あの人の——お茶を——やつて。

マツヂ

(ヤンにパンの一片をやりながら。) さあ、いたづら小僧。笛をおよし。(火の處へ行つて跪く。) 消えか

かつてるわ。

ミセス・ロバアツ

(幽かな微笑をもつて) 同じことだよ!

(ヤン呼子笛を吹き出す。)

マツヂ

しつ!しつ! ——この子は——

(ヤン吹くのをやめる。)

ミセス・ロバアツ

(微笑しながら) 吹かしておやり、マツヂ。

マツヂ

(火の側で跪いふまま、 傾ける。) 待つてばかり待つてばかり。あたしはとて我慢が出来ない、待つてばかり。待つてばかり——それが女の務めなのだ! 集つてゐる人達の聲が聞えて——あたしには聞える!

(彼女はテエブルに肘を付いて、手の上に顎を置く。彼女の後方でミセス・ロバアツは前へ乗り出す、罷上職

工の集會の物音が聞えて来るにつれて、痛ましい愈々募る興奮をもつて。)

幕が下りる。

第二場

四時すぎである。灰色の薄れ行く光の中に、ぬかつた空地に職工達が群集してゐる。前面には、鐵條網の垣でくざられて、運河の高く築いた曳船路があつて、一隻の荷船が繋つてゐる。彼方には沼地と雪とに掩はれた丘陵がある。『工場』の高い壁が運河から空地を横ぎつて繞つてゐる。この塀の角に樽と板とで造つた粗末な演壇がある。その上にハアネスが立つてゐる。ロバアツは少し群集から離れて、壁にもたれてゐる。高く築いた曳船路には二人の船夫がアラアラしながら吞氣さうに煙草を吞んでゐる。

ハアネス

(彼の手を差しのべながら) さあ、我輩は正直に話したのだ。若し明日の朝まで喋べつてゐてもこれ以上に云ふことはない。

ヤゴオ

(薄黒く、黄色い帯びた、スメイン人らしい顔付きの男で、ちよつぱりした薄い鬚を生してゐる。) 若し、一寸お尋ねします! 會社は罷工破りを雇ふでせうか?

バルギン

(恐ろしい横幕。) 雇ふなら雇ふて見るがいい。

(群集中に荒々しい眩きが起る。)

ブラオン

(丸顔の男。) ぢやあ何處から奴等を連れて來るのだ?

エヴァンス

(小さなせかせかした、せつからの男で、喧嘩早い顔をしてゐる。) 罷工破りは何時でもゐるのだ、それが彼等の本性なのだ。自分だけ助からうつて奴が何日でもゐるからね。

(又もや荒々しい眩き。ちよつぱり群集がざわつく。老トマスがやつて來て前列に立つ。)

ハアネス

(片手を挙げながら。) 罷工破りを雇ふことは出来ない。が、それは何んにもなりはしない。で諸君

は道理を辨へなくてはならない。諸君の要求は、吾々が其準備をしてゐない時に、一時に十數件のストライキの重荷を負はせやうとしたものだ。組合は或る一個人に對してではなくすべてに對する正義によつて存在してゐるのである。公平なる人々は屹度諸君に告げるに違ひない——諸君は思慮を缺いだと? 我輩は、諸君が餘りに極端に諸君の有する處の權利を主張したとは云はない、然しながら諸君は現在においては極端に走りすぎてゐる。諸君は自ら陥穽を掘つたのである。諸君は其處に止まらうとするのか、それとも其處から出ようとするのか? どちらなのだ!

ルイス

(目鼻立ちのくつきりしたウェルス人で、濃い口髭を生してゐる。) 君の云ふ通りだ、先生! どちらにするのだ?

(又もや群集がざわつく、ラッスが急いでやつて來て、トマスの隣に立つ。)

ハアネス

諸君の要求を妥當なる程度に引き下げるがいい。さうすれば吾々は諸君の爲に飽くまでも盡力する。若し又それを拒絶するならば、我輩は再び此處へ時間を空費に來ないことを斷言して置く。我輩が猥に言葉を弄するやうなものでないことは、既に諸君の知らるる處である。若し諸君が我輩の

信するが如き健全なる人々であるならば——たとへ何人がそれに反對せよと諸君に忠告するとも——（彼はロバアツに眼を向ける。）諸君は讓歩の決心を爲すべきである、而して諸君の條件を満足し得るやう吾々に信賴すべきである。諸君はいづれを取らうとするのか？一致團結して、勝利か——それとも——現在の如き飢餓か？

（群集中から長く續く眩き聲が起る。）

ヤゴオ

（不機嫌に）自分の知つてゐることを喋べれ。

ハアネス

（眩き以上に聲を高くして。）知つてゐること？（冷やかな激情をもつて。）諸君の経験して來たことはすべて我輩も経験して來たのだ——我輩は（一人の青年を指しながら）その若者位しか無い時分にそれを経験したのである。其當時の組合は今在るが如きものではなかつた。何がそれを強大ならしめたのであるか？一致團結がそれを強大ならしめたのだ。我輩はすべてそれを経験して來たのだ、確に、その烙印は今も猶我輩の靈魂に残つてゐる。我輩は諸君がどれだけ苦しんだかを知つてゐる——諸君の語る何事でも我輩の知らざるは無いのである、然しながら全部は一部よりも大である、然して

諸君は一部に過ぎない。吾々の味方になれ、然らば吾々も亦諸君の味方になるであらう。

（一同を眼で探しながら、彼は待つ。眩きは益々大きくなる、職工は幾つかの小さな集團を造る。グリーン、

バルギン、ルイス等話し合ふ。）

ルイス

中々物の分つたことを喋べるぢやないか、あの組合の野郎は。

グリーン

（平靜に。）ああ！若し俺の云ふことを聞いたら、二個月も前に物の分つたことが聞けたのだ。

（二人の船長の笑つてゐるのが見える。）

ルイス

（指し示しながら。）見な、垣の向ふに馬鹿野郎が二人ゐらあ！

バルギン

（陰鬱な激昂をもつて。）笑ふのをやめねえと、顎をぶち割つてくれるぞ。

ヤゴオ

（出し抜けた。）君は火夫の給金は多いと云つたね？

ハアネス

我輩は多いとは云はない、唯外の工場の火夫と同じ賃銀を得てゐると云つたのだ。

エヴァンス

嘘を云へ！(喧騒) ハアバアのとはどうだ？

ハアネス

(冷やかな皮肉をもつて。) 嘘はそちらだ。ハアバアの工場は時間が長い、だから賃銀は同じことだ。

ヘンリー・ラウス

(役の見ジョオオジの角だけ黒くしたやうな男。) 土曜日の時間外勤務は二倍増しといふのは賛成してくれますかね？

ハアネス

勿論、賛成する。

ヤゴオ

吾々の會費はどうなつたのだ？

ハアネス

(冷やかに。) それをどうするかは話したぢやないか。

エヴァンス

ああ！するか、何時もするするだ！君は吾々を仲間割れさせやうとしてゐるのだ。(喧騒。)

バルギン

(喚く。) がやがや騒ぐな！

(エヴァンス腹立しげに見返へる。)

ハアネス

(聲を張り上げて。) 右の手と左の手との區別の出来る者は、組合が決して泥棒でも裏切り者でも無いことを知つてゐる筈だ。我輩は云ふだけのことを云つた。とくと相談するがいい、我輩に用事が出来たら何時もの處にゐる。

(彼は飛で降りる、群集道を開ける、その間を通つて出て行く、船夫の一人輕蔑の身振りでそのパイプを動かしながら、彼の後を見送る。職工達は淺つもの集團になつてゐる、多數の者共は唯一人壁にもたれてゐるロバアツに視線を向ける。)

エヴァンス

あいつは諸君を罷工破りにしやうとしてゐるのだ、確にさうだ。あいつは諸君を俺達に背かせやうとしてゐるのだ。罷工破りになる位なら、——俺はかつゑ死にした方がまだ。

バルギン

誰も罷工破りのことを云つてゐやあしねえぢやないか——もつと氣を付けて口をきけ？

鍛冶屋

(髪の黄色い、腕の大きな青年。) 女はどうなるのだ？

エヴァンス

男に我慢の出来ることは女にだつて出来る筈ぢやあないか？

鍛冶屋

君はおかみさんがないのだらう？

エヴァンス

そんなものを持つたあ思はないのだ。

トマス

(聲を張り上げて。) おい！ ロンドンと妥協することをわし達に委せろ。

ダヴィス

(色の淺黒い、落付いた、陰氣な男。) 演壇に上れ、云ひ度いことが有るなら、上つてから云へ。

『トマス』』さいふ叫びが起る。彼は演壇の方へ押しやられる、彼は漸くにして登壇し、帽子を脱いで、四邊の靜まるのを待つ。沈黙！)

(赤毛の青年。)

(不意に。) えれいぞ、トマス爺い。

(荒々しい笑聲。船夫等は何か話す。再び沈黙、トマス喋り始める。)

トマス

わし達は皆ふけ、みへ落ち込んでゐるのだ、わし達をすこへ落したのは自然だ。

ヘンリー・ラウス

吾々を其處へ落したのはロンドンだ！

エヴァンス

それは組合だ。

トマス

そいつはロンドンではねえ、と云つて又組合でもねえ——そいは自然だ。で誰でもねんけんが自然に負けるのは決して恥ではねえ。なぜだと云ふと、この自然は素敵にでけえのだ、そいは人間よりはすつとでけえのだ。わしのこのあとまの中にはおぬし達のどのあとまよりも、どつさり年が這入つてゐるのだ。それで、こつやつて自然に反對してゐるのは大變よくねえのだ。何んにもならねえこつて、外のねんけんになんぎを掛けることは、よくねえこつた。

(笑聲起る。トマス腹立しげに續ける。)

何がおかしいのだ？よくねえぞ、それは！わし達は主義の爲に戦つてゐるのだ、わしが主義のせんじやでねえと云ふものはない筈だ。けいども自然が『止まれ』と云ふ時にやあそれに對して指を鳴らすのはよくねえのだ。

(ロバアツ笑ふ、他の者からは賛成の眩き起る。)

この自然はけけんを取らんといかん。潔白で、正直で、正しくて、慈悲深いのがねんけんの務めだ。教會がさう云つてゐるのだ。(ロバアツに向ひ、腹立しげに。)で、いいか、ダヴィッド・ロバアア、教會はおぬしに、自然に背かないでもそれが出来るかと云つてゐるんだ。

ヤゴオ

組合はどうするのだ？

トマス

わしは組合を信用せん、あいらはわし達をコミみたいに扱かつた。『吾々の云ふ通りにしろ、』とあいらは云うのだ。わしは二十年間も火夫頭をしてゐる、でわしは組合に斯う云つたのだ——(昂奮して。)—『ぢやあおぬし等は、わしが話せるやうに、あの連中のする仕事に對してえくらが正當の賃銀だか、それを話せるか？』と。わしはこの二十五年間組合を出して來た、が——(非常なる昂奮をもつて)—無駄だ！かたりでなくて何んだ、あのハアネスどのが何んと云つたつてだ！

(眩き聲起る。)

エヴァンス

ヒヤ、ヒヤ。

ヘンリー・ラウス

馬鹿を云へ！それなら脱會しろ！

トマス

いいか、若し或るねんけんがわしを信用しねえなら、わしも其男を信用する筈がねえではないか

?

ヤゴオ

その通りだ。

トマス

あいらにはかたかりをさせて置け、わし達はわし達ですることをするのだ。

(眩き聲起る。)

鍛冶屋

俺達はさうしてゐるぢやねえか？

トマス

(益々昂奮して。) わしは何んでも自分でやるやうに育てられたのだ。わしは物を買ふ金がねえ時には、それなしで辛抱するやうに育てられたのだ。一體他人の金をあてにして、色んなことをしようてえのがよくねえ。わし達は男らしく戦つた。若しわし達が負けたつて、そいはわし達が悪いのぢやねえ。わし達の爲に、ロンドンと妥協することをわし達に委せる、若しわし達が成功しねえならえぬみたにかつゝ死にしたり、他人のしつほにつかまつて、わし達のことをして貰つたりするよ

りは、男らしくめけた方がましだ！

エヴァンス

(眩く。) 誰がしたいと云つたい？

トマス

(頭をのびして。) え、何んだつて？若しわしが一人のねんけんを相手にして、奴がわしをててき倒したとすると、わしは誰の處へも加勢をてのみに行きはしねえ、わしは起ち上るのだ、そして奴がわしを旨くててき倒すなら、わしはぢつとしてゐるまでよ、え、さうぢやないか？

(笑聲起る。)

ヤゴオ

組合無用！

ヘンリー・ラウス

組合賛成！

(他の者共それについて叫ぶ)

エヴァンス

罷工破りめ！

(バルギンと鍛冶屋と、エヴァンスの方に向つて拳をふる。)

トマス

(身振りをして。) わしはとしよれだ、いいか。

(忽ち沈黙、そして再び咳き起る。)

ルイス

馬鹿おやぢめ、『組合無用』だなんて！

バルギン

火夫の奴等め！二ベンス呉れりやあ俺は奴等を束にしてはり倒してやる。

グリイン

最初に俺の云ふことを聞いたら——

トマス

(額を拭きながら。) わしが云はうと思つたことを愈々云はんらん時が来た——

ダヴィス

(咳きながら。) さうよ、云ふべき時だ。

トマス

(嚴肅に。) 教會は斯う云うのだ、この争闘を續けるな！それを止めろ！と。

ヤゴオ

嘘を云へ！教會はやれと云つてるのだ！

トマス

(さげすんで。) そおが！わしの頭には耳があるぞ。

赤毛の青年

ああ！長いのがある！

(笑声起る。)

ヤゴオ

その耳が聴き間違へたのだ。

トマス

(興奮して。) わしが間違つてねえなら、おぬしが間違つてゐる、両方とも本當でことは出来ねえ。

赤毛の青年

教會なら出来らあ!

(『若者』笑ふ、群集の間に眩き起る。)

トマス

(『若者』に眼を注ぎながら。) ああ! おぬしは、ふるびの道を歩いてゐるな。わしはおぬし達皆んなにもさう云ふのだ。若しおぬし達が教會に反對するなら、わしは一緒にはならねえ、かめを恐るるものは誰だつて一緒にはならねえ。

(彼は演壇から下りる。ヤゴオ演壇の方へ進む。『あいつを上らせるな!』といふ叫び聲が聞える。)

ヤゴオ

あいつを上らせるなつて? 言論は自由ぢやないか。確に。(彼登壇す。) 俺の云ふことは、そんなに澤山はないのだ。どうか事件を明白に見て貰ひ度い、諸君は此道を此處までやつて來た、然るに今諸君は旅行を中止しやうとするのだ。吾々は皆んな一艘のボートに乗込んでゐた、然るに今諸君は二つに分裂しやうとするのだ。吾々機械工は諸君の味方をした、然るに今諸君は吾々に背負投けをくわさうとしてゐるではないか? 若し斯うなることが最初から知れてゐたら吾々は諸君と一緒に

事を始めはしなかつたのだ! 俺の云ひ度いことは、これだけだ。トマス爺さんは、バイブルをよく勉強しなかつたのだ。若し諸君がロンドンやハアネスへ讓步するなら、それは吾々に糞湯を吞ますものだ——我身を助ける爲に——それはとんでも出来いことだ、それは卑怯なことだ。

(彼降壇す、皮肉な調子で話される彼の短い演説の間、群集の間には落ち付かない不安がある。ラウスはつさみ出て、演壇に飛び上る。群集の間から不賛成らしい不穏な眩き起る。)

ラウス

(非常なる興奮をもつて語る。) 俺は演説屋ではない、俺の云ふことは心の底から出るのだ。俺の云ふことは、人間の本心だ。人間は自分の母親が餓死するのを、ちつとして見てゐられるか? 今それが出来るか?

ロバアツ

(前へ出ながら。) ラウス!

ラウス

(猛烈に彼を見詰めながら。) シム・ハアネスの云つたことは正當だ! 俺は考が變つたのだ!

エヴァンス

ああ！變心したこ云ふのだな！

（群集は非常なる驚きを示す。）

ルイス

（ラウスに向つて呼びかけながら。）おい！何んだつて氣が變つたのだ？

ラウス

（甚しき興奮をもつて語る。）あの男の云つたことは正當だ。『吾々の味方になれ、』彼はさう云つた、『然らば吾々も諸君の味方になるであらう。』吾々が長い間、間違つてゐたのは全く其點である。して、それは誰の罪であるか？（彼はロバアツを指す。）その男だ！『いかん』と其男は云ふのだ、『泥棒と戦へ、』と其男は云ふのだ、『奴等の息の音を止めてしまへ！』と。が、息の音を止められたのは奴等ではないのだ、吾々の吾々の息の音が止められたのだ、これが全く間違ひのない處だ。俺は演説屋ではない、俺の身體の中の肉と血とが口をきいてゐるのだ、それは俺の心臓だ。（威嚇的ではあるが稍羞恥を帯びた身振りでロバアツに向ひ。）あの男は又諸君に向つて演説するに違ひない、が俺は云つて置くが、聞いてはいけない。（群集呻く。）あの男の舌には地獄の火が憑り移つてゐるのだ。（ロバアツが笑つてゐるが見えぬ。）シム・ハアネスの云ふ通りだ。組合を離れた吾々は何んだ——一握りの枯

葉——一吹き煙だ。俺は演説屋ではない、が俺は云ふ、止めてしまへ！止めてしまへ！女や子供を餓死させない内に。

（同意の喧きが殆んど不同意の喧きを壓する。）

エヴァンス

何んで又君は罷工破りになつたのだ？

ラウス

（凄まじい権威で。）シム・ハアネスは善く知つてゐることを喋べつたのだ。吾々にロンドンと妥協することを委せてくれ、俺は演説屋ではない、が俺は云ふ——この暗黒な悲慘は止してしまへ！

（彼は頭巻を一巻きまいて、頭後ろへそらし、演壇から飛び下りる。群集は喝采して前へさ押し寄せる。）

『もう澤山だ！』『組合賛成！』『ハアネス賛成！』の叫び聲の中をロバアツは靜かに登壇する。ちよつとの間ひつそりよる。）

鍛冶屋

聞きたくねえぞ。止めろ！

ヘンリー・ラウス

下りろ!

(こんな叫び聲と共に一同は演壇に押し寄せる。)

エヴァンス

(烈しく。) やれ、やれ! ロバアツ! ロバアツ!

バルギン

(眩きながら。) 俺にどたまをぶち割られないやうに用心するがいい。

(ロバアツ群集に對し、彼等が段々沈黙するまで彼の眼で彼等を探ぐる。彼は演説し出す。船夫の一人は立上つてちつき立つてゐる。)

ロバアツ

諸君は俺の云ふことを聞きたくないと言ふのか? 諸君はラウスや、あの老人の云ふことは聞くが俺の云ふことは聞かないと言ふのか。諸君は諸君に對してあんなに公平で有つた組合のシム・ハアネスの云ふことを聞いた、恐らく諸君はロンドンから來た連中の云ふことも聞くに違ひない? ああ諸君は呻くな! 何んの爲にだ? 諸君は奴等の土足で頸を踏ん付けられたいのか? (其時バルギンが冷靜なる悲痛をもつて演壇の方へ人を押し分けてゐるので。) 君は俺の頸をぶち割りたいのだな、ジョン・バ

ルギン。俺に演説させてからぶち割るがいい、それが君に満足を與へるのなら。(バルギンちつきして立つてゐる、不機嫌さうに。) 俺は嘘突きか? 卑怯者か? 裏切り者か? 若し俺がさうだつたら、諸君は屹度俺の云ふことを聞かうとするに違ひないのだ。(眩き聲は止んで、四邊は實に靜かになる。) 此處にゐるものの内で、このストライキで俺よりも得る處の少ないものが、唯の一人でもゐるか? 俺よりも失ふ處の多かつたものが唯の一人でもゐるか? この厄介な事が起つて以來八百磅も醜金したものが、唯の一人でもゐるか? どうだ、ゐるのか、ゐないのか? トマスは幾ら出した——十磅か五磅か一體幾らだ? 諸君はあの男の云ふことを謹聴した、而かもあの男は一體何を云つたのだ? 『誰も俺が主義の信者で無いと言ふものはあるまい』とあの男は云つた——(辛辣なる皮肉をもつて。)——『が自然が止まれ、それは自然に背くと云ふ』と云うのだ。俺は云ふが、若し人間が自然に向つて、『出来るなら俺からこれをどけてくれ!』と云ひ得ないならば——(一種の昂揚をもつて)——その男の主義はその胃の腑にすぎないのだ。『おお、然し』とトマスは云ふ、『人間は潔白で、正直で、正しく慈悲深くなる事が出来る。そして自然に向つて帽子を取るべきだ!』と。俺は諸君に斷言するが自然は潔白でも、正直でも、正しくも、慈悲深くも無いのだ。君達の中で山向ふに住んでゐて、雪の降つてゐる夜くらがりの中を疲れ切つて歸つて行く連中は——その歩みの一吋一吋をも自然と戦

つてゐるではないか？諸君は寢そべつたままで、この慈悲深い自然の優しい憐憫に頼らうとするのか？やつて見るがいい、さうすれば直に諸君が何を對手にしないではないかが分るに違ひない。人間といふものは——（彼は握り拳で一撃す。）——自然に對抗する時においてのみ始めて人間たるを得るのだ。「讓歩しろ」とトマスは云ふ。「跪け、馬鹿な戦を止める、さうすれば多分、多分お前達の敵は残物を投げ與へてくれるだらう」と。

ヤゴオ

斷じていかん！

エヴァンス

詛へ奴等を！

トマス

わしはそんなことは云はん。

ロバアツ

（辛辣に。）若し君がさう云はないまでも、その積りだつたのだ。それから君は教會について何んと云つた？『教會がそれに反対してゐる』と、君は云つた。『教會はそれに反対してゐる！』若し教

會と自然とが手を引いて行くとすると、俺はそんなことを聞くのは生れて初めてだ。其處にゐる若い男は——（ラウスを指しながら。）——俺の舌には地獄の火が悪り移つてゐると云つた。若しさうならば俺はそれをもつて降参しやうなどといふ意見を残らず焼き枯らしてしまふ積りだ。降参するなんてことは卑怯者と裏切り者とのすることだ。

ヘンリー・ラウス

（ヨオジ・ラウスが進み出るので。）向つて行け、ヨオジ——あの悪口を我慢すな！

ロバアツ

（彼の指をばじきながら。）止め、ヨオジ・ラウス、今は個人の問題をきめるべき時ではない。（ラウス止まる。）が、もう一人諸君に演説したものが有つた——即ちシモン・ハアネス氏だ。吾々はハアネス氏及び組合に對して別に感謝すべき譯がない。彼等は吾々に、『お前達の仲間を見棄てる、でないと吾々はお前達を見棄てるぞ』と云つた。而して彼等は吾々を見棄てたのだ。

エヴァンス

その通りだ。

ロバアツ

シモン・ハアネス氏は利巧な人である、が彼の来やうが遅すぎた。(非常なる確信をもつて。)シモン・ハアネス氏が何んと云はうとも、トマスやラウスが何んと云はうとも、此處にゐる何人が何んと云はうとも——吾々はこの戦には勝つてゐるのだ!

(群集近付く、熱心に見上げながら。冷刻なる侮蔑をもつて。)

諸君は諸君の胃の腑に壓迫を感じたのだ。諸君はその戦ひが何んであつたかを忘れてしまつたのだ。俺は度々諸君に話した筈だ。今もう一度だけ諸君に話さう。この戦は國家の身體と血とが吸血動物を相手取つての戦である。彼等が打つ有らゆる打撃、彼等が吸ふ有らゆる息で彼等自身を消耗するものが、彼等によつて身を肥やし、慈悲深い自然の法則によつて何處までも何處までもふとる處のものを對手取つての戦である。そのものこそ「資本」である!それは人間の額の汗と彼等の頭腦の苦惱とをその思ふままの代價で買ふ處のものだ。俺がそれを知らないだらか?俺の頭腦の働きは七百磅で買はれてゐる、彼等はその七百磅によつて一本の指すら動かさずに十萬磅を儲けてゐるではないか?それは出来るだけ多くを取つて、出来るだけ少なく與ふるものだ。それが「資本」といふものだ!それは諸君に、「お前達は實に氣の毒だな——お前達は大變困つてゐるやうだね、」と云ふが諸君を少しでも樂にしてやる爲に其配當の半シルすらも與へやうとはしないものだ。それが「資本」とい

ふものだ!口では色んなことを云つてゐるが、彼等の内に貧乏人を助ける爲に所得税を一ペニーでも上げること同意するものが一人でもあるならば云つて貰ひ度い?それが「資本」といふものだ!それは白面石心の怪物だ!諸君は今それを隨つかすことが出来た、諸君は諸君の悲惨な肉體的苦痛を脱せんが爲に、この最後の瞬間に降参しやうとするのか?俺は今朝ロンドンから出かけて来た老人共の處へ行つた時、俺は奴等の胸の底まで見抜いてしまつた。彼等の一人が其處に座つてゐた——吾々によつて營養を得てゐる肉の塊であるスカントルベリイが、會社の株主を代表して座つてゐた、舌をも指をも動かさずにぐづと座つてゐる配當を得てゐる——唯その食物が脅かされる時のみ目を覺ます大きな物云はぬ牡牛。俺は彼の眼の中を見た、そして彼が恐れてゐるのを知つた——自分自身及び彼の配當について恐れ、彼の俸給について恐れ、彼が代表してゐる株主全體について恐れてゐた、而してたつた一人の外はすべて恐れてゐた——夜間森の中へ迷ひ込んで、木の葉のさざらといふ囁きにも飛び上る子供達のやうに。俺は諸君に求める——(彼は言葉か切つて、四邊がすつかり静かになるまで手を差しのべて待つてゐる)——奴等に斯う云ふ全權を俺に與へてくれ、「ロンドンへ歸るがいい。職工は諸君に用は無い!」と。(呟き起る。)俺にさう云はしてくれ、俺は誓つて云ふが、一週間たたない内に諸君のすべての要求はロンドンから得られる。

エヴァンス、ヤゴオ、其他

全權！あの男に全權を興へろ！萬歳——萬歳！

ロバアツ

吾々が戦つてゐるのは、この今といふ短い時間の爲ではない、（眩き聲沈まる。）吾々自身の爲ではない、吾々の小さな肉體や、その要求の爲ではない、有らゆる未來を通じて来るすべてのものの爲である。（非常なる悲哀をもつて。）おお！諸君——彼等に對する愛の爲に、彼等の頭上にこの上石を轉がす勿れ、大空を暗くする手傳ひをして彼等を苦い海に捲き込みしむる勿れ。彼等は、俺に起り得る最大不幸を、吾々のすべてに起り得る最大不幸を許されてゐる、さうではないか——さうではないか？若し吾々が（熱烈に）この世界が初つて以來、吾々自身、吾々の妻子から生命を奪ひ取つたあの血腥い唇を有する白面の怪物を衰弱せしめることが出来たならば。（熱情の調子を落して、が極度の壓力と張さをもつて。）若し吾々が、それに對して胸に胸を眼に眼を向け、それが助命を嘆願するまでそれを壓迫するだけの男性的精神を持つてゐないならば、それは依然として生命を奪ひ續けて行くに違ひない、而して吾々は永久に現在の如き（殆んど嘔くやうに）犬よりもひどい状態に留つてゐるに違ひない。

（全き沈靜、ロバアツはその身體を少しゆすぶりながら立つてゐる、彼の兩眼は群集の面を燃やす。）

エヴァンとヤゴオ

（不意に。）ロバアツ！（その叫びは和せられる。）

（群集の内が少しざわつく、マツヤが曳船路の下、通り抜けて演壇の傍に立ち、ロバアツを見上げる。不意に審かしさの沈黙。）

ロバアツ

『自然』はあの老人は云ふ、『自然に譲る』と。俺は諸君に云ふ、自然の面を張り叩せ——そしてやる處までやつて見ろと！

（彼はマツヤの姿を認める、彼は眉を擧げて横を向く。）

マツヤ

（低い聲で——演壇に近く。）おかみさんが死にかかつてゐますよ！

（ロバアツある昂揚の頂上から引き卸されたかのやうに彼女を見詰る。）

ロバアツ

（言葉を續けやうと努力しつつ。）俺は諸君に云ふ——さう云へ——さう云へ——

(彼は群集の間の眩き聲で聞えなくなる。)

トマス

(進み出て。)あの子の云ふことが分らねえのか?

ロバアツ

何んだ?

(死の如き沈黙。)

トマス

おぬしのおかみさんよ!

(ロバアツ逡巡する、それから身振りをして、彼は飛び下りる、そして曳船路の下を向ふへ行く、人々は彼の爲に路を開ける。立つてゐる船夫は提燈を開けて明かりをつける用意をする。日が慌だしく暮れて行く。)

マツヂ

急がなくともいいのに! アンニー・ロバアツは亡くなつた。(それから沈黙の内に、烈しく。) めくらの獵犬の群め! この上どれだけ女を死なせる積りだ?

(群集彼女を避ける、そして當惑した不安の動作をもつて、幾つかの小集團となる。マツヂは曳船路を急ぎ

足で出て行く。一同は彼女の後を見送つて黙つてゐる。)

ルイス

何んて疝癢持ちだ!

バルギン

(呻きながら。)あいつの頬けたをくらわしてやりてえ。

グリーン

若し俺の云ふことを聞いたら、あの氣の毒な女も――

トマス

教會に反對したので罰を蒙つたのだ。わしは斯うなると話したのだ!

エヴァンス

さうだとすりやあ猶更あの男を助けてやらなくちやならん。(喝采。) 今あの男が倒れたからと云つて、諸君はあの男を見棄てやうとするのか? あの男のかみさんが亡くなつた時に、あの男を裏切らうとするのか?

(群集は眩き且つ喝采する。)

ラウス

(演壇の前へ進み出ながら。) 女房を亡くしたつて！ああ！諸君には見えないのか？内を見る、自分の女房を見る！誰がそれを助けるのだ？諸君の内が同じやうになるのも長いことではないのだ！

ルイス

さうだ、さうだ！

ヘンリー・ラウス

その通りだ！ジョオジ、その通りだ！

(同意の咳き起す。)

ラウス

吾々が目くらなのではない、ロバアツが目くらなのだ。何時まで彼を我慢するつもりなのだ！

ヘンリー・ラウス、バルギン、ダヴィス

奴を排斥しろ！

(この叫び聲に和するものがある。)

エヴァンス

(猛烈に。) 倒れてゐる男を蹴るのか？倒れてゐる男を？

ヘンリー・ラウス

奴に口をきかすな！

(エヴァンスはバルギンの脅威に對して腕を擧げる。提燈に明かりをつけた船夫は、それを頭の上にかざす。)

ラウス

(演壇に飛び上りながら。) ぢやあ一體何があの男を倒したのだ、あの男の向ふ見ずの剛情ではないか、諸君は自分が進んで行く方向以外は少しも見えない男について行かうといふのか？

エヴァンス

あの男は女房を亡くしたのだ。

ラウス

それはあの男のせるで外のものの知つたことぢやない。あの男を排斥してしまへ、あの男が諸君の女房や母親を殺してしまはない内にだ。

ダヴィス

奴を倒せ！

ヘンリー・ラウス

奴はスツカリ片付いたのだ！

ブラオン

奴はモウ澤山だ！

鍛冶屋

澤山すぎらあ！

(群集これらの叫びに和す、エヴァンス、ヤゴオ、クリインの三人を除いて、クリインは穩やかに鍛冶屋と議論をしてゐる。)

ラウス

(がやがやいふ聲の中から。) 吾々は組合と妥協することにしやう、諸君。

エヴァンス

(猛烈に。) 罷工破りめ！

バルギン

(擧猛に——彼に打つてかからうと身構えながら。) 罷工破りたあ誰のこつだ、裏切り者ッ！

(エヴァンス拳を擧げて、打撃を受け止め、やり返へす。格闘。船夫は提燈を高く掲げながら、その光景を面白さうに見てゐる。老トマス進み出て両手を差し出す。)

トマス

争闘を耻ぢろ！

(鍛冶屋、ブラオン、ルイス、赤毛の青年、エヴァンスとバルギンとを引き分ける。舞臺は殆んど暗い。)

幕が下りる

第三幕

午後五時である。美術的に裝飾せられてゐるアンダアウツドの客間で、エニツドが長椅子に腰をかけて赤ん坊の上衣を縫つてゐる。エドガアは室の中央にある細長い脚の卓の處で支那製の小箱をいぢつてゐる。彼の眼は食堂に通する二重扉に注がれてゐる。)

エドガア

(支那製の小箱を下へ置いて、時計を見ながら。) 丁度五時だ、皆んなあそこで待つてゐるのだが、フ

ランクの外は、何處へ行つたのだね？

エニツド

何か契約のことでガスゴインのそこへ行かなくてはならなかつたのですわ。あの人がゐなくては
いけませんの？

エドガア

いや吾々を助けることは出来ない。これは重役の仕事だからね。(帷で半ば隠れてゐる一重扉の方へ
仕草をしながら。)お父さんはお部屋にゐらつしやるのかい？

エニツド

ええ。

エドガア

あそこにて下さるといいんだがね、エニツド。(エニツド彼を見上る。)これは實に不快極まる仕
事なのだからね。

(彼は再び小箱を取り上げて、それをいぢくり廻はす。)

エニツド

あたし、さつきロバアツの内へ行つたのよ、テツド。

エドガア

それは餘り利巧でなかつたね。

エニツド

あの男は、おかみさんを殺してゐるんですわ。

エドガア

吾々がだらう。

エニツド

(不意に。)ロバアツは讓歩すべきだと思ひますわ！

エドガア

職工側にも澤山云ひ分はあるのだからね。

エニツド

あたし、あそこ行かなかつた時の半分も職工に同情が出来なくなつたの。あいらはあなた方に對
して階級的感情を抱いてゐるのですわ。可哀相なアンニイは本當にひどく悪るさうでしたわー火

は消えかかつてゐるし、適当な食物だつて無いんですもの。

(エドガアあちこちさ歩く。)

でも、あの女はロバアツの爲に辛抱する積りなのよ。こんな悲惨が行はれてゐるのをすっかり見ながら、どうもすることが出来ないと思へると、すべてのことに眼をつぶる外はないと思ひますわ。

エドガア

出来ればね。

エニツド

行く時にはあだし職工側でしたけども、行くと同時に直ぐ反對に考へるやうになりましたわ。世間の人は労働階級に同情せよなどと云ひますが、その人達はそれをやつて見ることや、それを實行することが、果してどんなことだかを知らないのですわ。全く見込みはありませんわ。

エドガア

ああ！成程。

エニツド

職工をあんな状態に打つちやつて置くのは恐ろしいことですわ。あだし、お父さんが何んとか讓

歩されるといいと思ひますわ。

エドガア

しないね。(陰氣に。)お父さんに取つては一種の宗教なのだからね。畜生！わたしはどんなことになるか知つてゐるのだ！お父さんは否決されるに違ひない。

エニツド

まさかそんなことは！

エドガア

いや、する——皆んな恐れてゐるのだからね。

エニツド

(憤然として。)お父さんは我慢なさないわ！

エドガア

(肩をゆすつて。)然し投票で破れたら、それを我慢しなくてはならないのだよ。

エニツド

おお！(彼女は吃驚して立ち上る。)でもお父さんは辭職するでせうか？

エドガア

勿論！それはお父さんの根本的の信仰なのだからね。

エニツド

でもお父さんは、この会社に夢中になつてらつしやるんですもの、テツド！お父さんはもう何んにもなくなつてしまひますわ！それは恐ろしいことだわ！

(エドガア肩をゆする。)

おお、テツド、お父さんはあんなに年を取つていらつしやるんですからね！皆んなにそんなことをさせないで！

エドガア

(言葉によつて彼の心持を隠しながら。)このストライキに對しては、わたしは職工側に同情してゐるのだからね。

エニツド

お父さんはもう三十年から社長をしてらつしやるんですからね！お父さんが何もかもお拵らへになつたんですわ！景氣の悪るかつた時のことを思ひ出して御覽なさい、それを何時も旨く切り抜

けて來たのは、全くお父さんの力ですわ。おお、テツド、あなたは是非——

エドガア

どうして貰ひ度いと云ふんだね？さつきはお父さんが譲歩してほしいと云ふ。そして又今は譲歩しないやうにお父さんの味方になつてほしいと云ふ。これは遊戯ぢやないからね、エニツド！

エニツド

(躍起となつて。)あたしにだつて遊戯ぢやありませんよ、お父さんがこの世で心にかけていらつしやるものをつかり無くするかも知れないのは。若しお父さんが譲歩なさらないで、そして否決されたら、お父さんは屹度倒れてしまはれますわ！

エドガア

お前さんは職工を斯んな状態に打つちやつて置くのは恐ろしいと云つたぢやないか？

エニツド

ですけどね、テツド、お父さんはどうしてもそれを我慢は出来なくつてよ！どうかして皆んなにさうさせないやうにして頂戴。外の人達はお父さんをこわがつてゐますわ。若しあなたさへお父さんの味方になれば——

エドガア

(彼の手を頭に置きながら。) 自分の信念に背いて……お前さんの信念に背いて！それが個人的に人を壓迫するといふ段になると――

エニツド

個人的では有りません、お父さんのことです！

エドガア

お前さんの家族若くはお前さん自身、それから又外聞がある、それ以上に！

エニツド

(口惜しうに。) あたしの云つてることを真面目になさらないのなら、よくつてよ。

エドガア

わたしはお前さんと同じやうにお父さんが好きなのだ、然しそれだからと云つてどうにもならないのだよ。

エニツド

職工達のことは何んとも云へませんけどね、何しろ推測ですから。でもお父さんは、何日卒倒さ

れるかも知れないつてことが分つてゐるんですからね。まさかお父さんより職工達の方が大切だと

エドガア

勿論お父さんの方が大切さ。

エニツド

ぢやあ兄さんの心持は分りませんわ。

エドガア

ふむ！

エニツド

自分達のことだつたら違ひますわ、でもお父さんのことですからね！兄さんには本當にはつきりとお分りになつてゐないやうだわ。

エドガア

わたしにははつきり分つてゐる。

エニツド

お父さんを助けるのは、兄さんの第一の義務ですわ。

エドガア

どうだか。

エニツド

(懇願的に。) おお、テツド！お父さんにはもうその外の楽しみはないのよ、それはお父さんに取つては致命的の打撃となるに違ひありませんわ！

エドガア

(彼の感動を押へながら。) それは知つてゐる。

エニツド

約束して！

エドガア

出来るだけのことはする。

(彼二重扉の方へ向く。)

(帷の垂れてゐる扉が開いて、アンソニーが現はれる。エドガアは二重扉を開けて通り抜ける。)

(スカントルメリーの聲が幽かに聞ゆる。『五時すぎに何時までも片付かない——父あのホテルで晩飯を食はなくてはならん！』二重扉が閉まる。アンソニー前の方へ進んで来る。)

アンソニー

ロバアツのそこへ行つたと云つてゐたやうだな。

エニツド

ええ。

アンソニー

こんな深い淵に橋を架けやうとすることが、どんなことだか分つてゐるかね？

(エニツド仕事を小さな卓の上に置いて彼に顔を向ける。)

砂で篩を満たすものだ！

エニツド

そんなことを！

アンソニー

お前は、お前の手袋をはめた手で、現世紀の悩みを除かうと思ふのだな。(向ふへ歩いて行く。)

エニツド
お父さん！

(アンソニー二重扉の處で立ち止る。)

あたしお父さんのことばかり考へてゐますの！

アンソニー

(二層和らかに。) わしは自分のことは自分で氣を付けることが出来るよ。

エニツド

お父さんは若し——(指示しながら)——そこでお負けになつたら、どんなことになるか御存じ？

アンソニー

わしは負けはしない。

エニツド

おお！お父さん、その機會を與へないやうにして頂戴。あなたはお身體がよくないのだから、どうしても重役會へ出席なさらなくてはなりませんの？

アンソニー

(苦い微笑をもつて。) 缺席して逃げ出すのかな？

エニツド

でもみんなでお父さんを否決しますよ！

アンソニー

(彼の手入扉にかけて。) 見てゐて貰はう！

エニツド

お願いですからお父さん！

(アンソニー和らかに彼女を顧みる。)

いけません？

(アンソニー頭をふる。彼扉を開ける。ひそひそと話し聲が聞える。)

スカントルベリイ

六時半の汽車には食堂があつたかね？

テンチ

いいや、無かつたと思ひます。

ワイルダア

よし俺は云つてしまはう、もうこれは澤山だ。

エドガア

(鏡く。) 何んです？

(それは忽ちやむ。アンソニー扉口を通り抜けて、扉を締める。エニツド狼狽い仕草と共に扉の處へ駆けよる。彼女は手を取手にかけて、それを開けやうとする、それから爐の處へ行つて足で防火格子をこつこつさける。不意に彼女はベルを鳴らす。フロスト玄關に通ずる扉から這入て来る。)

フロスト

お呼びになりましたか、奥様？

エニツド

職工達が來たらね、フロスト、ここへ通しておくれ、玄關は寒いからね。

フロスト

食器部屋へ入れましたら、奥様。

エニツド

いいえ、あたしあの——あの人達に氣を悪くさせたくないの、あの人達は本當におこりつほいからね。

フロスト

左様で御座います。奥様。(問。) あのそれから何んで御座いますが、アンソニー様は朝から何んにも召し上りませんが。

エニツド

知つてよ、フロスト。

フロスト

ウ井スキイ・ソオダアを二杯召し上つただけで御座います、奥様。

エニツド

まあ！そんなものを上げないやうにしておくれな。

フロスト

(嚴肅に。) アンソニー様は中々氣むづかしくつてゐらつしやいます、奥様。まだお若い方で、何がよくないか御存じ無いのではありませんからね、おつしやる通りにいたさないと御承知になります。

ん。

エニツド

誰だつてさうだわね。

フロスト

左様で御座います、奥様。(静かに。) ストライキのことを申上げるのは誠に出すぎたことでは御座いますが。私は、皆様が一時アンソニー様の云ふ通りになさいまして、後でそつと職工の要求を聞いておやりになれば、それが一番よろしい方法かと心得ます。私は、度々、あの方にはさういたすのがよろしいのを存じてゐますので、奥様。

(エニツド頭をふる。)

若し逆らはれますと、疝癢をお起しになりますから、(心得顔で。) 私なども自分で経験が御座いますが、疝癢を起しますと、何時も後で後悔いたすので御座います。

エニツド

(微笑をもつて。) 疝癢を起したことがあつて、フロスト?

フロスト

はい、奥様、時々はそりやひどい疝癢を起します。

エニツド

一度も見ないのね。

フロスト

(非人格的に。) はい、奥様、左様で御座います。

(エニツド扉の方へさ動く。)

(感情をもつて。) 御存知の通り、奥様、私は十五の時からアンソニー様に御奉公してをりますので、あんなにお年を召されてから反対せられてをられますのを見ると心配で御座います。實は私ウエンクリン様にお話しいたしたので御座います(聲を落しながら。)—皆様の内で一番物が分つてゐらつしやるやうですから—處が、あの方の云はれますには、『それは至極尤もだフロスト、然しね、このストライキは非常に重大な事なのだからね、』と斯う云はれたので御座います。で私は、『確に、あらゆる關係者につけて重大で御座います、』と申し上げたので御座います、『が、あの方に花を持たせて上げて下さいまし。花を持たせて上げて下さいまし。例へて申しますと、人間が石の壁へ突き當つたといたしますと、それに頭をぶつ付けるものは御座いません、誰だつて我慢いたすので

御座います』と。『さうだ』と、あの方はおつしやいました、『それをお前の旦那に云つたらよからう。』(フロスト彼の爪を眺める。) かういふ次第なので御座います、奥様。私は今朝アンソニー様に斯う申し上げたので御座います、『それだけの価値が御座いますでせうか?』つて、『畜生、』あの方はおつしやいました。『フロスト、出すぎたことを云ふな、でないと暇をやるぞ!』御免下さいまし、奥様、こんな言葉を使ひまして。

エニツド

(二重扉の方へ歩いて行きつつ、耳を傾けながら。) お前あのロバアツといふ男を知つてるかえ、フロスト?

フロスト

はい、奥様、尤も話をしたといふ譯では御座いませんので。然しあの男の顔を見れば、どんな人間だかは分ります。

エニツド

(足を止めて。)え?

フロスト

あの男は其邊にをります害の無い社會主義者の一人では御座いません。あの男は猛烈です、身體の中に火を持つてをります。つまり私が『個人的』と申してをりますもので。人間は勝手な意見を持つて差支へないので御座ります、個人的でない限りは、然し個人的になりますと、安全とは申されません。

エニツド

お父さんもロバアツに對して、さういふ風に考へていらつしやるらしいのよ。

フロスト

いや確に、奥様アンソニー様はロバアツに對して反感を抱いてをられます。

(エニツドきびしく彼を見る、が彼が飽くまでも眞面目なのを見て、唇を噛みながら立つてゐる、そして二重扉を眺めてゐる。)

これは二人の間の例の烈しい争闘なので御座います。私はあのロバアツといふ男は我慢が出来ません、私の聞いた處では、あの男は並の職工にすぎないと申すことで御座います、若しの男が何か發明をいたしたので御座いますなら、何百といふ外の職工より暮しにくい譯はありません。私の兄弟は新式の物を云はぬ給仕人を發明いたしました——でも、誰も何も呉れはいたしません。その界

限では随分廣くそれを使つてゐますけれど。

(エニツド一層二重扉に近づく。)

世間には自分が紳士に生れて來なかつたといふので、一生世間を恨む人間があるので御座いますと私の申しますのは——紳士達は、よしや自分が誰か外の者より一二階級上であつても、一二階級下であるのと同じやうに、決して人を見下けたりはなさらないと云ふので御座います。

エニツド

(稍ちれたさうに。) ええ、分つててよ、フロスト。お前這入つて行つてお茶を召上りませんかと伺つて來ておくれ、あたしがさう云つたつて。

フロスト

承知いたしました、奥様。

(彼は靜かに扉を開けて這入る。その時熱心な稍激した話と聲がちよつと聞ゆる。)

ワイルダア

わたしは賛成いたし兼ねる。

ワンクリン

こんなことはもう度々やつたのだ。

エドガア

(ぢれつたさうに。) ぢやあ、何んです提案は？

スカントルベリイ

左様、御親父は何んと云はれるかな？お茶？わしはいらん、わしはいらん！

ワンクリン

社長の云はれるのは——

(フロストが自分の後ろに扉を締めながら再び這入つて來る。)

エニツド

(扉の處から離れて。) お茶は召上らないのかえ、フロスト？

(彼女は小さな卓の處へ行つて、ぢつとしてゐる、赤ん坊の上衣を眺めながら。)

(支關の方から小間使が這入つて來る。)

小間使

トマスといふ女の方が參りましたが、奥様。

エニツド

(頭を上げつつ。) トマス? どちらのトマスさんのの——女の人だつて——?

小間使

はい、奥様。

エニツド

(氣のない様子で。) まあ! 何處にゐるの?

小間使

お立間で御座います。

エニツド

わたし逢ひたくないけど——(躊躇する。)

フロスト

私が計らひませうか、奥様。

エニツド

あたし行つて見ませう。いいえ、此處へ通しておくれ、エレン。

(小間使ミフロストと出て行く。エニツドはきつと唇を締めて、小さな卓に向つて腰を下し、赤ん坊の上衣を取り上げる。小間使マツヂ・トマスを案内して出て行く、マツヂは扉の處に立つ。)

エニツド

お這入り。何んですの。何んの用で來たんですの?

マツヂ

ロバアツのおかみさんからことづけを頼まれて來ました。

エニツド

ことづけ? さう。

マツヂ

どうぞお母さんをよろしくお願ひ申しますつて。

エニツド

どうしたといふんでせうね。

マツヂ

(不機嫌に。) それがことづけです。

エニツド

でも——どうして——なぜでせう。

マツヂ

アンニイ・ロバアツは亡くなりました。

(沈黙。)

エニツド

(驚愕して。)でもさつき逢つてからまだ一時間にもならないのに。

マツヂ

寒さと飢の爲です。

エニツド

(立ち上りながら。)おお！それは嘘です！あの人の心臓が——なぜお前さんはそんな顔をして、わたしを見るのです？わたしはあの人を助けやうとしたのです。

マツヂ

(押へ付けた猛烈さをもつて。)わたしは、あなたがそれを知りたいとお思ひになるだらうと思つた

ものですから。

エニツド

(熱烈に。)本當にひどい！わたしがお前さん達皆んなを助けたいと思つてるのが分らないのかね？

マツヂ

わたしは向ふから先きに害を加へない人に、こちらから害を加へたことはありません。

エニツド

(冷やかに。)わたしがどんな害を加へました？なぜそんな風な物の云ひ方をするのです？

マツヂ

(實に酷烈なる緊張をもつて。)あなたは慰み半分にはわたし達の様子を探偵に來たのです！一週間の飢餓、それがあなたに必要です！

エニツド

(怯まずに。)馬鹿なことをおつしやい！

マツヂ

わたしはあの人の死ぬ處を見てゐました、あの人の手は寒さで青くなつてゐました。

エニツド

(悲嘆の瞬間をもつて。) おお!なぜあの人はわたしに助けさせてくれなかつたのだらう?本當にくだらない見えだつたのだ!

マツヂ

見えなんでものは身體をぬくめるたしにはなりませんからね。

エニツド

(熱烈に。) わたしお前さんに話しはしませんよ!わたしの思つてることがどうしてお前さんに分るの?わたしがお前さんよりもいい内に生れたのは、何もわたしの知つたことではありませんからね。

マツヂ

わたし達はあなたのお金は入りません。

エニツド

お前さんには分らない、分りたくもないのだ、どうぞ歸つて頂戴!

マツヂ

(憎くさげに。)あなた方があの人を殺したのです、いくらあなたが優しいことを云つたり、あなたや、あなたのお父さんが――

エニツド

(憤怒と激情をもつて。)何んてひどいことを!お父さんはこの悲惨なストライキの爲に御自分でも苦しんでいらつしやるのです。

マツヂ

(陰氣な勝利の色をもつて。)ぢやおお父さんにロバアツのおかみさんの亡くなつたことをお話しなすつたらいいでせう!さうすれば少しは快くなるでせうから。

エニツド

お歸へり!

マツヂ

あの人に子供のないのがせめてもの仕合せだ、あなた見たいに。

(彼女は不意に且つ迅速に身を動かしてエニツドに近づく、その眼を小さな卓の上に置いてある赤ん坊の上衣に注ぎながら。エニツドあはててそれを取り上げる、それが赤ん坊でもあるかのやうに。二人は一

嗚の間隔を置いて立つてゐる。眼と眼と見合はしながら。

マツヂ

(ちよつと微笑しつつ上衣を指しながら。)

ああ！氣がつかましたね！

(エニツド泣きたいのをこらへながら、赤ん坊の上衣のしわを伸ばす。)

エニツド

お歸へり！

マツヂ

ことづけは云ひましたよ。

(彼女は向きかはつて玄關の方へ出て行く。エニツドは彼女が出て行つてしまふまでちつとしてゐたが、卓にぐつたりと腰を下して、猶も抱きしめてゐる上衣の上に頭をうなだれる。二重扉が開いて、アンソニイがゆるゆる這入つて来る、彼は娘の傍を通り抜けて腰掛椅子に腰を下す。彼は甚だしく昂奮してゐる。)

エニツド

(激情を隠しながら……心配さうに。) どうなすつたの、お父さん？(アンソニイ身振りをする、が返事はし

ない。) 誰なの？

(アンソニイは答へない。エニツド二重扉の方へ行つて、丁度這入つて来るエドガアに出會ふ。二人は低い聲で話し合ふ。)

どうしたの、テツド？

エドガア

ワイルダアの奴さ！人身攻撃を始めたんだ！實に無禮なことをぬかしたのだ。

エニツド

どんなこと云つたの？

エドガア

お父さんは年を取りすぎて衰弱してゐるので、自分のしてゐることが分らないと云ふのだ！あの男を六人分よせたつてお父さんだけの價値はありやしないのだ！

エニツド

さうですとも。(二人アンソニイを見る。)

(扉が廣く開かれて、ヤンクリンとスカントルベリイが現はれる。)

スカントルベリイ

(ひそひそさ。) こんな風では困る！

ワンクリン

(進み出で。) ええ、社長！ワイルダア君はわたしにあやまつてくれと云つてゐます。これ以上のことは出来ませんからな。

(ワイルダア、テンチを後にして這入つて来る、そしてアンソニーに近づく。)

ワイルダア

(不機嫌。) わたしは前言を取消します。失禮いたしました。

(アンソニー彼に向つてうなづく。)

エニツド

まだきまりませんの、ワンクリンさん？

(ワンクリン頭をふる。)

ワンクリン

皆んな此處に揃つてをりますよ、社長、あなたのお考は？會議を續けますかな、それとも向ふの

部屋へ行きますかな？

スカントルベリイ

左様、左様、續けませう。何んとかきめねばなりませんからな。

(彼は小さな椅子の處を離れて、不意に最も大きな椅子に腰を下して、樂になつたさういふ風を見せる。)

(ワイルダアとワンクリンも同じやうに着席する。テンチは背の眞直ぐな椅子を社長の側に引き寄せ議事録と針先万年筆をもつて椅子の端へ腰を掛ける。)

エニツド

(眩きながら。) あたしちよつと兄さんにお話があるの、テツド。

(二人二重扉から出て行く。)

ワンクリン

確に、社長、吾々は事實でない安全の心持で自ら欺むくのは無駄だと存じますね。若しこのストライキが總會前に解決を見ないと、株主共は屹度吾々を攻撃するに相違ありません。

スカントルベリイ

(身動きをしながら。) 何——何ですつて？

ワンクリン

もう屹度さうです。

アンソニー

するがいい！

ワイルダア

そして追ひ出されるのですかな？

ワンクリン

(アンソニーに。) わたしは自分の信ずる方針の爲に犠牲になるのは厭ひはせんが、他人の主義に殉ずることは御免蒙むり度い。

スカントルベリイ

至極御尤もで——そのことも一つ考へていただかなくてはなりませんな、社長。

アンソニー

吾々が強硬な態度を取るのは世間の雇主に對する義務です。

ワンクリン

然しそれにも程度がありますからな。

アンソニー

諸君も最初には皆腰が強かつたやうだな。

スカントルベリイ

(呻くやうに。) 吾々は皆職工が屈服するに違ひないと思ひましたのでな、然し奴等は——屈服しない！

アンソニー

今にします！

ワイルダア

(立ち上つてあちこち歩きながら。) わたしは職工を兵糧攻めにして勝つたといふ満足の爲に、わたしの實業家としての名譽を傷つけるに忍びん。(殆んど泣き出さんばかりに。) わたしはさうするに忍びん！現在の如き状態のまま、どうして株主に顔を合はすことが出来ませう？

スカントルベリイ

ひや、ひや——ひや、ひや！

ワイルダア

(自ら勵ましながら。) わたしは彼等に、わたし 諸君に五萬磅の損失を蒙むらせた、而かも尙自分の自尊心を傷つけるよりは更に五萬磅を失つた方がまだとは云へない。(アンソニーを眺めながら。) それは——それは不自然です！わたしは、あなたに反對する考ではありませんが——

ワンクリン

(言葉巧みに。) 如何でせう、社長、吾々は全權代理者ではないのですからね。吾々は機械の一部ですからね。吾々の唯一の仕事は、會社が安全に出来る限りの利益を上げるやうにするにあるのです。若しあなたがわたしを主義がないと云つて批難せられるなら、吾々は被委託者であるとお答へします。理性は吾々に、若し吾々がこの争闘を續けるならば吾々が賃銀の節約によつて損失を償ふことが出来ないことを示してゐます——確に、社長、吾々はそれを終結せしめなくてはなりません、出来るだけ有利な條件で。

アンソニー

いかん！

(一般的不満の間がある。)

ワイルダア

それでは行き詰まりだ。(一種の絶望をもつて両手をだらり垂らす。) これではとてもスペインへは行けぬ！

ワンクリン

(皮肉な調子を失はないで。) あなたの勝利の結果を聞かれましたか、社長？

ワイルダア

(感情を露骨に現はしながら。) わたしの家内は病氣なのだ！

スカントルベリイ

まあ、まあ！さう云つてはいけない！

ワイルダア

若しこの寒さを避けさせないと、どんな結果になるか受け合へない。

(二重扉を通じてエトガアが非常に勝つ顔付きで這入つて来る。)

エトガア

(彼の父に。) あなたはお聞きになりましたか？ロバアツのかみさんが死にました！

(すべての人が彼を見詰める、この報知の重大なことを量らざるかやうに)
 エニツドはさつき見舞ひに行つたのですが、石炭も、食物も、何んにも無かつたさうです。もう澤山だ!

(一座は沈黙する、すべての人が他人の眼を避ける、アンソニーのみはきつと彼の息子を見詰めてゐる。)

スカントルベリイ

その氣の毒な女を助けてやつたらと云ふやうなお話はありませんでしたな。

ワイルダア

(慌てて。)あの女は身體が悪るかつたのです。誰も吾々に責任があるなんて云ふことは出来ない。少なくとも——わたしには。

エドガア

(憤然として。)吾々一同の責任なのです。

アンソニー

戦争は戦争だ!

エドガア

女にはないのです!

ワンクリン

必ずしも女が最大の被害者でないことも時にはありますよ。

エドガア

若しさうだとすると一層吾々に責任があるのです。

アンソニー

これは素人の知つたことではない。

エドガア

何んともおつしやい。わたしはもう飽き飽きした。吾々には事件をこんなに進捗させる権利はないのです。

ワイルダア

わたしは全くこの事件が厭だ——あの急進派の悪黨めは屹度それを自分に都合のいいやうに誣むるに違ひない、そりやあ請合ひだ! 奴等は必ずあの氣の毒な女が餓死したなど出鱈目の噂を云ひふらすにきまつてゐる。わたしはそれに對して關係しない。

エドガア

それは出来ません。吾々は皆出来ないのです。

スカントルベリイ

(彼の椅子の腕を拳で叩きながら。) 然しわたしはこれに對して抗議しなくては——

エドガア

御勝手に抗議なさい、スカントルベリイさん、それは事實を變へることは出来ないのですから。

アンソニー

もーいい。

エドガア

(腹立たしげに彼に顔を向けながら。) いいや。わたしは自分の考をばつきりと申上げます。若し吾々が職工が苦しんではないと云ふならば、それは虚偽です。そして若し又彼等が困つてゐるとすると、吾々は人性から云つて女が一層苦しんでゐることを知つてゐる筈です、更に子供に至つては——それは——言語道斷です！

(スカントルベリイ椅子から立上る)

わたしは吾々が故意に残酷にしたとは云はない、決してそんなやうなことは云はない。が、わたしは、事實に對して眼を閉づるのは罪惡だと斷言します、吾々はこれらの人々を雇備してゐる。で吾々はそれから逃れることが出来ないのです。わたしはそんなに職工達のことを氣にはしない、然しながらこんな風にして女達を餓死させる前に重役を辭職します。

(アンソニー以外の人々は全部立ち上つてゐる、アンソニーは彼の椅子の腕を握つて座つたまま彼の息子を

見詰めてゐる。)

スカントルベリイ

わたしは——わたしは、さういふ風に云はれるのは善くないと思ひますな。

ワンクリン

少し誇張にすぎるやうですよ。

ワイルダア

わたしもさう考へる！

エドガア

(自副を失つて。) 事實を無視する必要はないぢやありませんか？若しあなた方が女の死に對する

責任を負ふと云はれるのならそれでよろしい——わたしは御免だ！

スカントルベリイ

まあ、まあ、君！

ワイルダア

責任を負ふ？わたしはまつびらだ、御免蒙むる！

エドガア

吾々はこの重役會における五人の重役ではありませんか、若し吾々の内の四人がそれに反対ならなぜ吾々は事件がこんなになるまで打ちやつて置いたのです？あなた方は確にその理由を御承知です——吾々は職工達を兵糧攻めにしやうとしたのです。然るに吾々の努力は一人の女を餓死せしめたにすぎない！

スカントルベリイ

(殆んどヒステリーのやうに。) わたしは抗議する、わたしは抗議する！わたしは人情のある人間だ——吾々は皆人情のある人間だ！

エドガア

(侮蔑的に。) 吾々の人情には少しも異状はないのです。それは吾々の想像力なのです。スカントルベリイさん。

ワイルダア

馬鹿なことを！わたしの想像力は君に劣りはしない。

エドガア

さうだとすると、あまりまだ善くないのでせう。

ワイルダア

わたしもこれを豫知したのだ！

エドガア

それならば何故断然反対しなかつたのです？

ワイルダア

した處が先づ駄目だからね。

(彼アンソニーを見る。)

エドガア

若しあなたを始めわたし、及び吾々の想像力は立派であると云はれる此席の皆さんが——

スカントルベリイ

(うるたへて。) わたしはそんなことは云はん。

エドガア

(少しも頓着せずに。) —— 断然それに反対せられたならば、事件はすつと以前に終結してゐたに違ひないのです、そしてこの氣の毒な女の命も、こんな風にして押しつぶされはしなかつたに違ひないのです。吾々の云ひ得ることは、他にも餓死せんとしてゐる女が幾人かあるに違ひないといふことです。

スカントルベリイ

いやお願いだからそんな言葉を——重役會では使はないやうにして下さい、それは——ひどすぎる。

エドガア

わたしは使ひます、スカントルベリイさん。

スカントルベリイ

ぢやわたしは、あんたの云ふことは聞きません。わたしは聞かん！それはわたしには辛い。

(彼は自分の耳を掩ふ。)

ワンクリン

吾々は誰も解決に反対はしてゐないので、あなたのお父さんの外は。

エドガア

わたしは屹度、若し株主が知つたら——

ワンクリン

わたしはあなたに、株主の想像力が吾々以上に鋭くないことが分るだらうと思ふ。一人の女が心臓が弱かつたからと云つて——

エドガア

かういふ争ひは有らゆる人間の弱い處を發見する。それは子供だつて知つてゐるのです。若しこの殺人的方針が行はれなかつたなら、あの女もこんな風にして死なないですんだのだ、そして馬鹿で無い限り誰にでも見えるこの悲惨な状態が演ぜられなくてもよかつたのだ。

(以上の言葉の間アンソニーはぢつ彼の息子を見守つてゐたが、その時立ち上らうといふ動揺を示す。が、)